

篠ノ井遺跡群Ⅱ

——市道山崎唐猫線地点——

1989・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできぬ、国民的財産であると考えます。

市民生活の充実という目標達成のために行われる開発行為の陰で失なわれていく埋蔵文化財に対し、我々はその保護・保存という大きな責任を負っております。

このたび市道山崎唐橋線道路拡幅改良工事が実施する運びとなりました。もとよりこの地一帯は、篠ノ井遺跡群の北西端に位置し、過去の調査でも周辺地域から重要な埋蔵文化財が発見されております。

発掘調査の結果、縄文時代から平安時代に至る遺構、遺物が発見されました。その内容につきましては本書に詳細に記載してあります。本書が埋蔵文化財に対し一層のご理解と、地域の文化の向上に役立ただければ大変幸甚に存じます。



最後に、発掘調査にあたり地元の皆様方のご協力を始め本報告書作成に至るまでの間、多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことに対し心から感謝申し上げます。

平成元年3月15日

長野市教育委員会

教育長 奥村秀雄

例 言

- 1 本書は市道山崎唐猫線道路拡幅改良事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 本書は調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要領は下記のとおりである。
 - ・遺構の測量は（有）写真測図研究所に委託し $\frac{1}{50}$ の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に $\frac{1}{100}$ の縮尺に統一してある。ただし遺物出土状況等微細を要するものについてはこの限りではない。
 - ・遺物実測図に関しては弥生・古墳時代の土器 $\frac{1}{50}$ 、奈良時代以降の土器 $\frac{1}{50}$ 、石器・金属器類 $\frac{1}{50}$ 、土器拓影 $\frac{1}{50}$ に統一してある。
 - ・奈良時代以降の土器実測図において、土師器は断面を白ヌキで、須恵器・灰輪陶器は断面を黒く表現してある。また赤彩品や黒色処理されたものはそれぞれ赤彩 、黒色処理  で表現してある。
 - ・奈良時代以降の出土土器の記述はその煩雑さを避けるため観察表形式をとっている。
- 3 本書作成に至る調査員の分担は下記の通りである。
 - ・遺構図整理・浄書 千野
 - ・遺物整理・実測 中殿 横山 小松 中沢 大室 千野
 - ・遺物浄書 千野
 - ・写真 千野
 - ・執筆 矢口（1章1節、2章） 千野（1章2・3節、3章、4章）
 - ・編集 千野
- 4 出土石製品の石材鑑定は唐沢茂氏（長野市立茶臼山自然史館）に依頼し、調査地の土壌体積状況については中村由克氏（野尻湖博物館）に現地調査をお願いし5章として玉稿を頂いた。記して感謝いたします。
- 5 調査によって得られた諸資料は長野市埋蔵文化財センターが保管しているが、将来的には長野市立博物館へ移管される予定となっている。出土遺物の注記記号は「篠ノ井遺跡群市道山崎唐猫線地点」の各頭文字をとって「SYK」と表記してある。

目 次

序

例 言

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過	1
-------------	---

第2節 調査体制	1
----------	---

第3節 調査経過	2
----------	---

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境	4
-----------	---

第2節 考古学的環境	4
------------	---

第3章 調 査

第1節 土層序ならびに遺跡の概要	14
------------------	----

第2節 遺構と遺物	14
-----------	----

第4章 総 括

第5章 篠ノ井遺跡群—山崎唐猫線地点—における地質

挿図目次

図1 遺跡周辺の地形と調査地①	5
-----------------	---

図2 遺跡周辺の地形と調査地②	6
-----------------	---

図3 調査地周辺の主要遺跡分布図	7
------------------	---

図4 調査区全測図	12
-----------	----

図5 調査区ならびに土層堆積状況	13
------------------	----

図6 1号住居址実測図	15
-------------	----

図7 1号住居址出土土器実測図	16
-----------------	----

図8 2号住居址実測図	17
-------------	----

図9 2号住居址出土土器実測図	18
-----------------	----

図10 3号住居址実測図	19
--------------	----

図11 3号住居址下層出土土器実測図	20
--------------------	----

図12 3号住居址上層出土土器実測図①	21
---------------------	----

図13 3号住居址上層出土土器実測図②	22
---------------------	----

図14 3号住居址上層出土土器実測図③	23
---------------------	----

図15 3号住居址上層出土土器実測図④	24
---------------------	----

図16 4号住居址実測図	27
--------------	----

図17 4号住居址出土土器実測図	28
------------------	----

図18 5号住居址実測図	29
--------------	----

図19 5号住居址出土土器実測図	30
------------------	----

図20 6号住居址実測図	31
--------------	----

図21 6号住居址出土土器実測図	32
------------------	----

図22 7号住居址実測図	33
--------------	----

図23 8号住居址実測図	33
--------------	----

図24 8号住居址出土土器実測図	34
------------------	----

図25 9号住居址実測図	35
--------------	----

図26 10号住居址実測図	36
---------------	----

図27	10号住居址出土土器実測図①	37
図28	10号住居址出土土器実測図②	38
図29	11号住居址実測図	39
図30	11号住居址出土土器実測図	41
図31	12号住居址実測図	42
図32	12号住居址出土土器実測図	42
図33	13号住居址実測図	43
図34	14号住居址実測図	44
図35	15号住居址実測図	44
図36	16号住居址実測図	45
図37	16号住居址出土土器実測図	46
図38	16号住居址出土土器拓影	46
図39	17号住居址実測図	47
図40	2号土壌実測図	48
図41	2号土壌出土土器実測図	48
図42	5号土壌実測図	49
図43	5号土壌出土土器実測図	50
図44	15号土壌実測図	50
図45	12号土壌実測図	50
図46	12号土壌出土土器実測図	51
図47	14号土壌・出土土器実測図	52
図48	19号土壌実測図	52

図49	19号土壌出土土器実測図	52
図50	23号土壌実測図	53
図51	23号土壌出土土器実測図	53
図52	2号溝址実測図	54
図53	2号溝址出土土器実測図	54
図54	4号溝址実測図	55
図55	4号溝址出土土器実測図	57
図56	6号溝址実測図	58
図57	6号溝址土器出土状況実測図	58
図58	6号溝址出土土器実測図①	59
図59	6号溝址出土土器実測図②	60
図60	その他の遺構実測図①	62
図61	その他の遺構実測図②	63
図62	遺構外出土土器①(縄文)	64
図63	遺構外出土土器②(弥生)	65
図64	遺構外出土土器③(弥生)	66
図65	遺構外出土土器④(奈良以降)	68
図66	石製品実測図①	70
図67	石製品・実測図②	71
図68	石製品・金属器実測図	72

図版目次

図版1	調査地近景 1号住居址 2号・3号住居址
図版2	4号住居址 5号住居址 6号住居址
図版3	8号住居址 9号住居址 10号住居址
図版4	11号住居址 12号住居址 13号住居址 14号住居址
図版5	16号住居址 17号住居址
図版6	1号溝址 2号溝址 4号・5号溝址…
図版7	6号溝址 同遺物出土状況 同南壁セクション
図版8	1号土壌 2号土壌 6号土壌

図版9	5号土壌
図版10	12号土壌19号土壌19号土壌遺物出土状況
図版11	調査風景
図版12	3号住居址上層出土土器
図版13	3号住居址上層・6号住居址・8号住居址・ 10号住居址出土土器
図版14	11号住居址・12号住居址・5号土壌・12号 土壌・4号溝址・19号土壌・6号溝址出土 土器
図版15	6号溝址出土土器 石製品

第1章 調査に至る経過

第1節 調査に至る経過

市道山崎唐猫線は、長野市篠ノ井字山崎から唐猫地籍にかけての道路で、千曲川自然堤防（微高地）の中央を縦断する形でのびている。

昭和63年度事業として長野市篠ノ井支所土木課では、このうち字山崎・宗旨坊地籍延長約280mにわたる道路拡幅改良工事を予定し、着工にむけて準備を進めていた。しかし用地交渉に行き詰まりを見せ、年度内着工が困難と考えられたため、埋蔵文化財発掘調査も次年度に繰り送りを想定していた。ところが、12月に入り担当部局より用地買収が一部を除き完了したとの一報が入り、至急発掘調査を実施されたい旨の依頼があった。

この時点では田中沖遺跡・稲田徳間遺跡の発掘調査中であり、時節柄最悪の条件を迎えるため次年度で対応したい旨連絡したのであるが、工事費の予算化・地元の要望等により工事延期は不可能であるとの回答を得た。発掘調査主体者である教育委員会（埋蔵文化財センター）でも、次年度送りにしても調査箇所および面積の増大が見込まれていたために、無理を押し2月から実施することにし準備にかかった。幸いにも暖冬の年に当たり、調査は思った以上の進行状況であった。以下調査に至る経過を日付を追って記載する。

平成元年1月14日付 長野市長 塚田 佐より文化財保護法第57条の3第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」の提出がある。1月17日付にて県教委教育長宛進達する。

1月18日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」を提出する。

1月29日付 県教委教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」(通知)がある。

1月30日 本日より発掘調査開始する。保護対象面積1,170㎡のうち900㎡以上を発掘調査を実施する予定で、発掘作業24日、発掘調査等に要する費用5,400千円を見積もった。

なお本遺跡の名称は「篠ノ井遺跡群」とした。篠ノ井遺跡群は長野市南部、千曲川右岸に展開する自然堤防上に立地する遺跡群であり、西側は聖川によって塩崎遺跡群と画され、東側は篠ノ井横田地籍にまで及ぶものと推定されている。

しかし今回の調査にても明らかなように、全面がすべて同一の集落址としてとらえられるものではなく、時期により核となる拠点集落がその位置を移動することによって形成された遺跡群としてとらえられるものである。本調査地は姫宮・五輪・宗旨坊・浄光の各地籍にまたがって存在するが集落範囲の推定にあたっては限られた調査範囲からは限界もあり、現時点でこれらの地籍名を遺跡名として使用するにはある種の危機を抱く。よってこの遺跡名の措定は将来的な検討に委ねることとして、今回は「篠ノ井遺跡群II—市道山崎唐猫線地点—」と仮称して報告するものである。

第2節 調査体制

調査は長野市教育委員会の直営事業として実施し、組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者 長野市教育委員会 教育長 奥村秀雄

総括責任者	長野市埋蔵文化財センター	所 長	諏訪部和彦 (平成元年 3 月 31 日 退任)
	"		水沢 国男 (平成元年 4 月 1 日 着任)
庶務係	"	所長補佐	小山 正
		職 員	青木 厚子
調査係	"	調査係長	矢口 忠良
	"	主 事	青木 和明
	"		千野 浩
	"	職 員	中殿 章子
			横山かよ子
	"	専門主事	小松 安和
			中沢 克三
			大室 昂

調 査 員 清水隆寿 (立正大学文学部卒)

調査作業員 飯島なみ子・内山直子・大田豊一・親松とめ子・兼山忠晴・北沢やすい・北村芳雄・駒村保・駒村敏子・田中義雄・鳥原仁彦・中沢源太郎・中村チヨコ・西沢乾・西沢毅・橋爪孝次・堀内ます子・三宅計佐美・三宅利正・矢島喜和子・矢島秀子

整理作業員 徳成奈於子・岡沢治子

第 3 節 調査経過

- 1月26日 重機による表土除去作業開始
- 27日 表土除去作業継続。午後調査機材搬入、テント設営。
- 30日 本日より作業員参加、本調査開始。終日遺構検出ならびに残土処理作業
- 2月1日 雨のため調査中止。現場テントにて終日土器洗浄作業
- 2日 SK1・2調査終了、写真撮影。SB2～4・SK5調査継続。
- 3日 SB4・5・SK6調査終了、写真撮影。SB1調査開始。
- 4日 SB2～4調査終了。写真撮影。SK5出土馬骨微細実測作業。第1回測量委託—写真測図研究所
- 6日 SB1調査終了、写真撮影。SB7調査開始。SK5骨取り上げ作業。
- 7日 SB7調査継続。SB8・SK7調査開始。
- 8日 SB7・8・SK7調査終了、写真撮影。SB9・10・SD1・2・SK8調査開始。
- 9日 SB9・10・SD1・2調査継続。
- 10日 SB10・SK8・9・SD1調査終了、写真撮影。雨のため午前中にて調査中止。
- 13日 第2回測量委託。SK11調査開始。
- 14日 測量作業継続。SD2・SB9調査終了、写真撮影。
- 15日 表土除去・残土処理作業。
- 16日 表土除去・残土処理作業。
- 20日 SD4調査継続。SB11調査開始。
- 21日 SD5調査開始。SB11・SD4調査継続。

- 22日 SD4・5調査終了、写真撮影。SD6・SK14～18・SB12調査開始。
- 23日 第3回測量委託。SK14～18・SB11・12調査終了、写真撮影。SB13調査開始。
- 25日 雨のため調査中止。現場テントにて土器洗浄作業。
- 27日 SD6調査継続。SB14調査開始。
- 28日 SB12・13調査終了、写真撮影。SB16～18・SK19～23調査開始。SB17・18・SK21～23調査終了、写真撮影。
- 3月1日 SD6・SB14・15・SK19調査継続。雨のため午前中にて調査中止。
- 2日 SD6・SB14・15・SK20調査終了、写真撮影。
- 3日 SK19調査終了、写真撮影。第4回測量委託。調査機材撤収。
- 4日 測量作業終了。本日をもって現場におけるすべての作業を終了する。

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境

長野盆地の南縁部、特に長野市と更埴市との行政区界周辺では、千曲川がもたらした自然堤防が顕著に発達している。もとより千曲川は源を甲武信岳(2,475m)に発し、支流河川の水を集めながら佐久盆地・上田盆地を開析し、地科郡に入るとその流れは緩やかになり蛇行するようになる。そして千曲川が上流からもたらした土砂は、長野盆地南縁部の沖積地を形成したばかりか、両側に土砂を積み上げ所々に微高地(自然堤防)を帯状に残している。また調査地周辺の自然堤防は、小河川による扇状地形の影響を余り受けておらず独立的なあり方を示す。この点を強調すれば背後に旧河川流路等による湿地(後背湿地)がこめられた顕著なあり方を示しているといえよう。更埴市境の長野市篠ノ井塩崎越から同作見にかけ幅広い弧状の水田面が展開している。この地域をこれにあてる。なお、昭和63年度に実施された長野自動車道建設にともなう石川条里遺跡の発掘調査所見から「J R稲荷山駅と中郷神社を結ぶ線に底台地があり、ここが弥生時代以降の居住域であり、石川条里遺跡を東西に二分していることが判明した」とされる。この底台地がどのあたりまで突出しているのか今のところ不明であるが、流路をさまたげる台地があったことは後背湿地形成の主たる要因を千曲川の旧河川氾濫原に求めることについては再検討する必要がある。篠ノ井川柳地区前面の後背湿地の北東には、千曲川の一支流犀川がもたらした川中島扇状地が展開する。その境は岡田川にあり、犀川水系・千曲川水系を合流し千曲川に払い落としている。後背湿地面に流れ込む河川に聖川がある。この河川は聖山北麓に源を発し、犀川丘陵を北流し、やがて東に流路を変え上石川の上流で安山岩の峡谷にあり、狭長な田野口盆地を形成する。上石川の峡谷から遷急点をもって石川水田面に注ぎこみ沖積扇状地を造り出すがそれほど顕著ではない。聖川は石川の字名が示すとおり土石を運搬する川で暴れ川を連想するが、発掘調査を継続している石川条里遺跡からはその假概が認められない。現在の流路に近い所を流れていた可能性が高い。ちなみに今では天井川となっており、堆積は続いている。長野市に接する更埴市稲荷山は佐野川による扇状地上にあり、石川水田面と趣を異にしている。

長野盆地西縁は犀川丘陵の山麓にあたり、所々に湖盆による平旦面が見られ、また瀬原田から石川の集落背後の長野盆地に突出する山境は地滑りによる地形であると推定される。

以上のように調査地周辺は他地域の様相と異なり、複雑な地理的環境下に内容の濃い歴史的空間を生み出している。

参考文献

更級埴科地方誌刊行会 『更級埴科地方誌』第1巻 昭和53年

長野県埋蔵文化財センター『長野県埋蔵文化財センターニュース』No.25・26 昭和63年

第2節 考古学的環境

古代における主たる集落遺跡は自然堤防上および犀川丘陵山麓部に求められ、近ごろの発掘調査所見からそれは帯状に展開し、縄文時代晩期から平安時代にわたる各期のものが複合していることが分かってきた。ただ昭和63年度に(財)長野県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施したJ R稲荷山駅北東地区の地表下約3mから縄



図1 遺跡周辺の地形と調査地①

(1 : 10,000)



図2 道路周辺の地形と調査地点



図3 調査地周辺の遺跡分布図

文時代前期の住居址が3件発見されていることを特記しておく。以下第3図に記載した番号に従って説明附記する。

表1

番号	遺跡名	遺構・遺物	文献等
1	松節 遺跡	(弥)後期土器、広鉾銅器片、石剣(古)堅穴住居1	1・5
#	中条 #	(弥)堅穴住居、箱清水式	2・5
#	伊勢宮 #	(弥)中期前葉土器・栗林式・箱清水式、石鎌・打製石包丁・石包丁・打石斧・挟入片刃石斧	3・5
#	一本木 #	(縄)晩期土器 (弥)栗林式・炭化米・箱清水式	5
#	塩崎小学校 #	(縄)晩期土器(弥)堅穴住居8・方形周溝墓2・溝1・土壇7、栗林式・箱清水式、石包丁・太形蛤刃石斧・紡錘車・打石斧・石鎌・垂玉・管玉(古)堅穴住居3、(奈)堅穴住居16・高床建物3(平)堅穴住居13・土拉3・井戸1、灰輪陶器・紡錘車・土鎌・砥石・石臼	4
#	殿屋敷 #	(縄)晩期土器(弥)堅穴住居2、箱清水式(奈)堅穴住居5・溝2(平)堅穴住居15・溝4・土拉9、灰輪陶器葉壺形藏骨器(中)溝1・土壇5・井戸18、内耳土器	6
#	散畑屋敷 #	(古)	
2	宗旨坊 #	(縄)晩期土器	
#	一里塚 #	(平)灰輪陶器把手付長頸瓶(藏骨器)	
#	聖川堤防上# (大規模自転車道)	(弥)堅穴住居・方形周溝墓、吉田式・箱清水式(古)(平)堅穴住居・井戸・土壇(中)土墳墓、人骨	7
#	聖川堤防上# (聖川堤防)	(弥)堅穴住居・方形(円形)周溝墓・土壇、栗林式・箱清水式、石器類・管玉・鉄剣・鉄釘・青銅環(古)堅穴住居・前方後円形周溝墓・土拉(奈・平)堅穴住居・溝、石臼(中)井戸・土墳墓	
3	横田 #	(縄)前期土器・磨石斧(弥)箱清水式(古)子持勾玉3(平)灰輪陶器・古瓦	2・9
#	富士宮 #	(弥)箱清水式(古)堅穴住居1(平)堅穴住居4、土鎌・鉄鎌(中)井戸、青磁・刀子・鉄滓(近)陶器	10
4	上石川 #	(弥)栗林式(古)(平)	
#	山田 #	(縄)石鎌(弥)箱清水(平)	
#	湯の入 #	(縄)前期土器(平)	
#	宮下 #	(古)(平)	
5	河越池北 #	(弥)箱清水式	
6	上見林 #	(縄)打石斧・石鎌	
7	下見林 #	(古)(平)	
8	楢下 #	(弥)堅穴住居、箱清水式(平)灰輪陶器	11
9	中郷 #	(平)	
#	鶴前 #	(弥)箱清水式(古)(平)	12
#	戸部間 #	(縄)磨石斧(弥)箱清水式(古)(平)	

番号	遺跡名	遺構・遺物	文献等
#	観音寺下遺跡	(縄)磨石斧	
#	鶴 萩 #	(縄)打石斧(弥)箱清水式(平)灰輪陶器	
#	立 町 #	(古)(平)	
#	堀の内 #	(弥)箱清水式	
#	越 #	(縄)打石斧(平)灰輪陶器	
10	山田屋敷 #	(縄)打石斧(平)	
11	戸 口 #	(平)	
12	大 峯 #	(縄)中期土器・石鎌・打石斧・磨石斧・垂玉(平)溝3、古瓦(中)和鏡	13
73	猪 平 #	(縄)前・中期土器・石鎌・石錘・打石斧・勾玉	

一方これらの集落遺跡を背景に、山麓・山頂部には多くの古墳が築造され、500余基からなる長野市松代町大室古墳群・90余基の長野市若槻吉古墳群に次ぐ密集地帯である。五世紀初等に位置付けられる国史跡川柳將軍塚古墳をはじめ山頂上には姫塚古墳・四之宮將軍山古墳・越將軍塚古墳があり、山腹に中郷神社古墳が築かれ、横穴式石室を有する後期古墳は山麓部に群集して築かれるようになる。

番号	古墳名	古墳の状況及び出土品	文献等	備考
13	海道北山2号古墳	前方後円(?)		
14	# 1号 #	円、横(長9.0m・巾1.5m・高1.5m)	14	
15	布施塚1・2号 #	円(径20m)、円(径10m)		
16	大平1号 #	円(径7.6m・高2.4m)		
17	# 3号 #	円(径30m・高1.5m)		
18	# 2号 #	円、横、墳滅		
19	上大久保2号 #	円、横、半墳		
20	# 1号 #	円(径4m)、横、半墳		
21	駕籠石 #	円、横、半墳		
22	六部塚 #	円、横、墳滅		
23	北石津 #	円、墳滅		
24	將軍塚 #	円(径24m・高4m)、横(長6.06m・巾1.36m・高1.72m)		
25	南石津 #	円、横(?)		
26	柳 沢 #	円、横、墳滅		
27	藤 塚 #	円(径16m・高2.5m)		
28	山畑新田 #	円(径6m・高1.6m)		
29	湯ノ入 #	円(径15.1m・高2.5m)		
30	姫 塚 #	前方後方(長31m・後方部巾20m・同高4m・前方部巾11m・高2.0m)	15・16	国史跡
31	川柳將軍塚 #	前方後円(長89m・後円径45~57m・同高10m・前方部巾26m・同高5m)、鏡鑑7・琴柱状石製品2・勾玉4・管玉100ガラス小玉519・滑石製小玉6・白玉39・埴輪円筒棺	15-16	#
32	湯ノ入古墳群	円、6基	16	
33	飯縄社古墳	円(径16.5m・高1.5m)、半墳、漢式鏡・直刀・留金具・小玉・土師器		
34	宮下1号 #	円(径5.5m・高1.8m)		
35	# 2号 #	円(径4.9m・高1.6m)		
36	大田和1号 #	円(径7m・高1.8m)		
37	# 2号 #	円(径6.6m・高1.6m)		

番号	古墳名	古墳の状況及び出土品	文献等	備考
38	大田和3号古墳	円、横(長6.6m・幅2m・高1.5m)		
39	城1号#	円(径7m・高2.3m)、横、半墳		
40	鏡板4号#	円(径4.3m・高2.4m)、横(長2.5m・巾1.4m・高1.2m)、半墳		
41	虚空藏平3号#	円、横、半墳		
42	鏡板古墳群	円、2基、半墳		
43	虚空藏平1号古墳	円(径9.6m・高1.6m)		
44	池の上#	円(径15.5m・高4m)、横(長9.2m・巾2.3m・高2.5m)	16	市史跡
45	丸山1号#	円、横、半墳		
46	丸山4号#	円、横(長4.2m・巾2m・高2.52m)、線刻絵画、金銅製太刀・刀子・鉄鏃・金環・丸玉・髹・管珠・釘・須惠器	16	市史跡
47	四之宮將軍山古墳群	円、4基、旗塚(?)		
48	# 古墳	円(径32m・高3.9m)		
49	薬師山古墳群	円、3基		
50	八ツ塚#	円、8基、壊滅		
51	中郷古墳	前方後円(長42m・後円部径18.2m・同高5.2m・前方部巾20.3m・同高3.3m)	14・16・17	市史跡
52	# 塚#	円、3基		
53	大伯母#	円(径11m・高2.5m)、横		
54	小日向#	円、横、半墳		
55	秋葉山#	円(径7m・高1.9m)		
56	鶴萩#	円(径15.5m・高2.9m)、横(長9.65m・巾2.45m・高2.85m)	16・18	市史跡
57	平#	円(径15.5m・高2.7m)、横(長6m・巾1.6m・高1.6m)		
58	八幡宮#	円(径17m・高5.2m)、壑、鉄刺・ガラス玉・碧玉製管玉・仿製変形四歌鏡		
59	城山#	円(径13.6m・高2.9m)、横		
60	東谷#	円(径7m・高2.4m)、横、直刀・金環		
61	越將軍塚#	円(径32m・高7m)、壑、円筒埴輪、小玉15	16・19	市史跡
62	湯の崎古墳群	円、2基		更埴市
63	東谷古墳	円(径15m・高2m)		#
64	一本松#	円(径11m・高2.5m)、横(長3.2m・巾2m・高1.5m)、八稜鏡・金環・土製勾玉	20	#
65	塚穴#	円(径13.5m・高4.5m)、横(長5m・巾2.8m・高2.5m)		#・市史跡
66	藤塚1号#	円		
67	# 2号#	円、横		
68	白山塚#	円、横、直刀・須惠器、壊滅		
69	赤田大塚古墳群	円、2基		
70	田野口大塚古墳	前方後方(長39.5m・後方部巾25m・同高4m・前方部巾9m・同高9m)	16	市史跡
71	大塚古墳群	円、4基、壊滅		
72	桜田塚古墳	円、横、直刀・刀子・馬具、壊滅		

またこの地域は、須恵器、古瓦の生産地でもあり、信田古窯址群と呼称されている。

表3

番号	遺跡名	遺構・遺物	文献等
73	湯の入窯址	(奈)須恵器窯、半地下式、甕・坏	21
74	松の山 #	(古)須恵器窯、地下式、甕・坏・坏蓋・短須壺・甗	22
75	鹿の入 #	(平)須恵器窯、半地下式、甕・坏	
76	鍋割 #	(平)須恵器・古瓦窯、2基	
77	いもじゃくぼ #	(平)須恵器窯、窯滓	
78	前田 #	(平)須恵器窯、2基、窯滓	
79	城の腰 #	(平)須恵器窯、窯滓	

分布図で示したほかに信田丘陵面には小瀬原窯址・原市場窯址・大峯窯址・長者池窯址が確認されている。いずれも半地下式登り窯と推定され、平安時代の所産と考えられている。

さらにこの小空間を二分して、廃寺跡が推定されている。北方に上石川廃寺跡(80)、南側に古瓦の発見がないものの長谷廃寺跡(81)がそれである。

以上長野市南縁の小地域空間に、考古学的事象が豊富な内容をもって展開している。一つ一つ解明していけば、新たな歴史を生み出す可能性を秘めている重要な地域である。

表4

[参考文献]

- 森嶋悠・木山一政『古代・中世』『更級地方地誌』(一) 昭和53年
 長野県史刊行会『長野県史』1巻(一) 昭和56年
 長野県教委『北陸新幹線建設予定地内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』昭和51年
 [文献等]
1. 森嶋悠『銅鐸及び石製模造鉢』『藤ノ井市指定文化財調査報告書』昭和51年
 2. 丸山一郎『善光寺平南縁の自然発露土の遺跡について』『信濃』III-26-5 昭和49年
 3. 磯崎正彦『長野県南縁ノ井市伊勢宮遺跡の古代弥生土器』『信濃』III-11-6 昭和54年
 4. 『伊勢宮遺跡』『長野県史』1巻(一) 昭和57年
 5. 長野市教委『塩崎遺跡群一環跡小学校校址遺跡の第1次調査報告書』昭和53年
 # 『F』# 『一』 第2次 『J』 昭和54年
 『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』昭和55年
 6. 西野光『善光寺平の土器群』『和洋女子大学紀要』8 昭和39年
 # 『長野県塩崎中学校出土土器』『土師土器集報本編』3 昭和48年
 7. 関口忠良『塩崎小学校校址遺跡』『長野県史』1巻(一) 昭和57年
 8. 長野市教委『塩崎児童館建設地が奈良時代住居址10軒を検出している。未報告』
 9. 長野市教委『塩崎遺跡群Ⅳ-市道松原一小田井神社校址遺跡』昭和61年
 この調査は松原・中本・伊勢宮・一本木の各遺跡を総観したもので、発生時代中期前葉から平安時代の聚住住居址192軒以上、土壇(井戸址含)113基、溝址33ヶ所、発生時代中期の本稻墓・土壇墓31基が検出されている。
 10. 長野市教委『塩崎遺跡群Ⅴ船屋敷遺跡一角間地区土器改良事産地点』昭和62年
 其他陶器系土器産出については『更級地方地誌』(二)を参照されたい。
 11. 長野市教委『藤ノ井遺跡群一環跡自走車道遺跡の調査報告』昭和55年
 12. 昭和55-57年度発掘調査。平成元年度発掘調査を継続し、2年度報告書発行予定。
 13. 宮本邦基『信濃国藤ノ井町発見の土持玉』『中部考古学会報』4-1 昭和14年
 14. 長野教委『藤田遺跡群富士宮遺跡一鉄塔移致に伴う緊急発掘調査報告書』昭和62年
 15. この遺跡より水田面に突出した微高地が(財)長野県埋蔵文化センターの調査により確認され、縄文前期整穴式住居跡、古墳時代前方後方形溝・土壇、中世の塋等が検出されている。現在発掘調査を実施している。
 16. (財)長野県埋蔵文化センターにより発掘調査が実施され、古墳時代初期以降の住居址等の遺構が検出されている。
 17. 長野教委『稻清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』昭和56年
 18. 藤原宏行・高崎光司・滝山雄一『善光寺平南縁における古墳の実測調査』『信濃』III-31-12 昭和54年
 19. 岩崎卓也『赤地塚古墳』『長野県史』1巻(二) 昭和57年
 20. 井山勝邦『信濃国更級郡石川村の古墳群』『考古学』1-5 明治34年
 21. 藤原直江『更級郡川柳村古墳』『歴史報告』2次正13年
 22. 森本六爾『更級郡川柳村における四角形発露の古墳』『信濃考古学会誌』1-2 昭和40年
 23. 『川柳村軍塚の研究』岡書店 昭和40年
 24. 藤原健『川柳村軍塚に寄せる幻想』『長野』5 昭和40年
 25. 木山一政『川柳村軍塚古墳出土銅鏡調査』『長野考古学会誌』2 昭和40年
 26. 下平孝夫『川柳村軍塚古墳発見の地層学的方法について』『信濃』III-20-4 昭和43年
 27. 長野県教委『長川川柳村軍塚古墳出土品』『県指定文化財調査報告書』9 昭和53年
 28. 藤原健『川柳村軍塚古墳の再認識』『千曲』23 昭和54年
 29. 宮下健司『長野県川柳村軍塚古墳をめぐる古史考』『信濃』III-31-9 昭和54年
 30. 岩崎卓也『川柳村軍塚古墳・稲塚古墳』『長野県史』1巻(二) 昭和57年
 31. 長野教委『改訂長野市の文化財』昭和54年
 32. 岩崎卓也『中郷古墳』『長野県史』1巻(二) 昭和57年
 33. 岩崎卓也『鶴岡古墳』『長野県史』1巻(二) 昭和10年
 34. 関口忠良『長野県軍塚古墳』『長野県史』1巻(二) 昭和57年
 35. 森本六爾『長野県軍塚古墳』『考古学』4-3 昭和8年
 36. 藤原健『長野県更級郡山崎の崎一松本古墳調査』『信濃』III-18-9 昭和41年
 37. 神津祐『更級郡川柳村の製陶址』『信濃考古学会誌』3-1 昭和7年
 38. 藤原武清・原田勝美『長野県下流土の須恵器(上)』『信濃』III-25-4 昭和49年

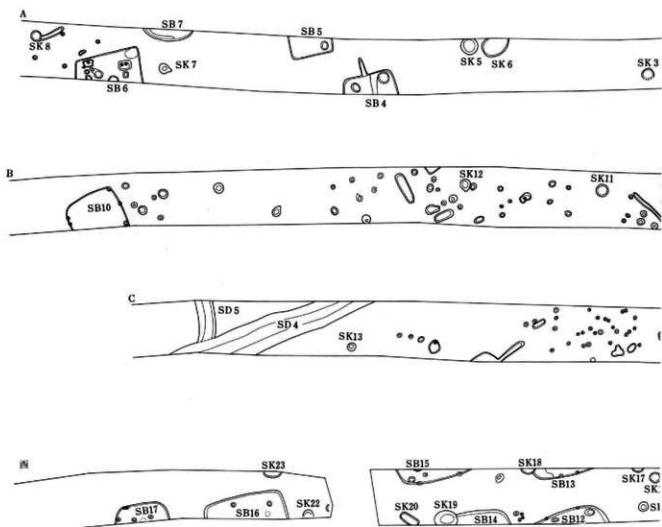


图4 调查区全测图

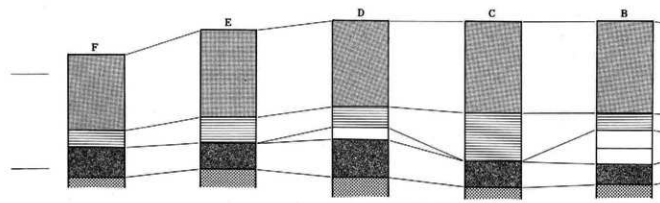
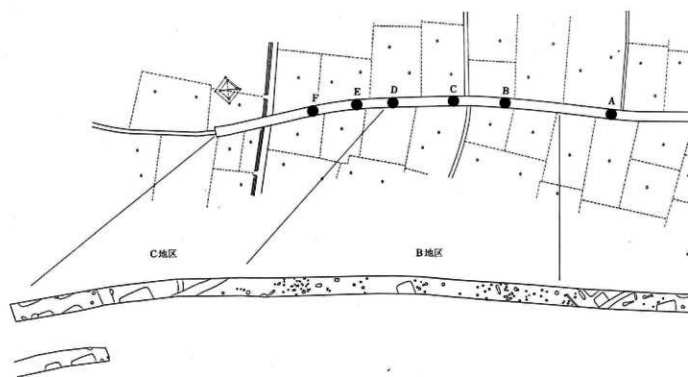


図5 調査区ならびに土層堆積状況

第3章 調 査

第1節 土層序ならびに遺跡の概要(図5)

本遺跡の土層堆積は基本的には以下の4層に分層しうる。

- | | |
|-------------|-------------------------|
| I層 茶褐色土層 | 表土層でありリング畑の耕作土層である。 |
| II層 黄茶褐色土層 | 下層はタカシコゾウを含む粘土層となる。 |
| III層 暗茶褐色土層 | 比較的粘性が強く固く締まる。遺物包含層である。 |
| IV層 灰黄褐色土層 | 硬質で全面に鉄分を含む。基盤層ととらえられる。 |

もっとも基本的な状況を示すと考えられるA地点の所見によれば、各層の現地表面からのレベルは、I層：現地表 ～ -92cm、II層：-92cm ～ -120cm、III層：-120cm ～ -150cm、IV層：-150cm以下である。しかし旧地形には若干の起伏が存在しすべて一様な状況を呈するわけではない。特にB～D地点は柱状図からもわかるように、基盤層のレベルが低下する傾向が認められ若干の微低地となり住居址等の生活遺構もほとんど存在しない。

次に遺構の分布状況から遺跡の概要について触れておきたい。調査区は便宜的にA～Cの3地区に分割した。前述のごとく微低地ととらえられるB～D地点付近はB地区に該当する。10号住居址以外は住居址は存在せず、小規模な土壇・ピット群が散在する状況を呈している。集落域はB地区を挟んでその東側のA地区と西側のC地区に求められる。B地区両端にはほぼ平行する2本の溝址SD2とSD4が存在し、あたかも集落域と微低地部分とを画しているような様相が伺われる。

C地区は弥生時代～古墳時代、A地区は奈良時代以降にその形成時期の中心が求められ、集落域は東側と西側へ更に拡張することが予想される。

第2節 遺構と遺物

1号住居址

遺構 (図6)

検出状況：A区東側で検出された住居址で、南側はガス管等による攪乱をうけ西側は3号住居址に切られる。形状・規模：規模を推定する根拠はないが一边4.50～5.0m程の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-55°-Eである。

覆土：大きくは二層に分層できるとともに暗褐色土で固く締まっている。下層に炭化物が顕著に認められる点のをのぞけば、上下二層を明確に分離しうる根拠はない。

床面・壁：床面は壁際をのぞいて全体に張り床が成され非常に堅緻な状態である。壁高は東壁34cm・北壁31cmとやや浅いが堀りこみは直に近い。

柱穴：P1が検出されている。径32cm・深さ14cmを測り主柱穴の一つと考えられるが、柱穴配置は不明といわざるをえない。

カマド：東壁中央付近に位置するものと思われる。ほとんどが破壊されておりかろうじて煙道部分を検出したのみである。燃焼部付近にあたる実測図中破線で示した範囲内には、焼土と炭化物が比較的多量に検出されている。

遺物出土状況：覆土下層から床面直上にかけて出土しているがほとんどが覆土内からの出土である。

遺物 (図7)

須恵器環・高台環・短頸壺・蓋、土師器高台環・甕等が出土している。5・7・8・は床面に接した状態で出土し、他は覆土内からの出土である。

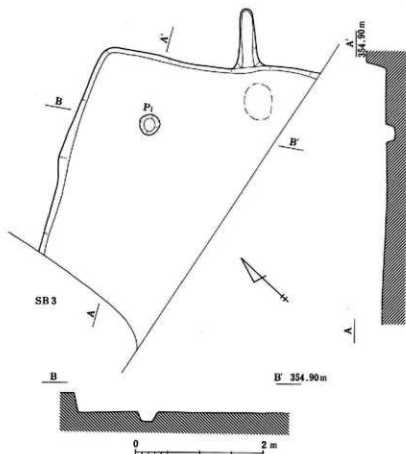


図6 1号住居址実測図

No.	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	環	11.8			1/8	ロクロナデ	
2	#	#	12.2			1/8	ロクロナデ	
3	#	#	13.6			1/8	ロクロナデ	
4	#	#	14.2			1/10	ロクロナデ	
5	#	#	7.5			1/3	ロクロナデ 底部：回転篋削り→ナデ	
6	#	#	6.1			1/3	ロクロナデ 底部：2回の回転糸切りがなされる	
7	#	蓋	9.2			1/4	ロクロナデ 底部：回転篋削り、内外面に自然釉付着	
8	#	#	10.5			5/6	底部：回転篋削り 坏部を故意に打ち欠いている	
9	土師	#	6.8			1/4	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理	
10	須恵	蓋	14.9			1/4	天井部回転篋削り2帯 外面自然釉付着	
11	#	短頸	5.3			1/6	ロクロナデ	
12	#	瓶	5.6			1/3	外面下半：2帯以上の回転篋削り 底部：回転篋削り	
13	土師	甕	16.3			1/8	外面：縦篋削り 内面：横ナデ	
14	#	#	16.8			1/10	外面：篋削り? 内面：横ハケ→ナデ	
15	#	#	6.9			5/6	内面：ナデ 底部：木葉底	

表5 1号住居址出土土器観察表

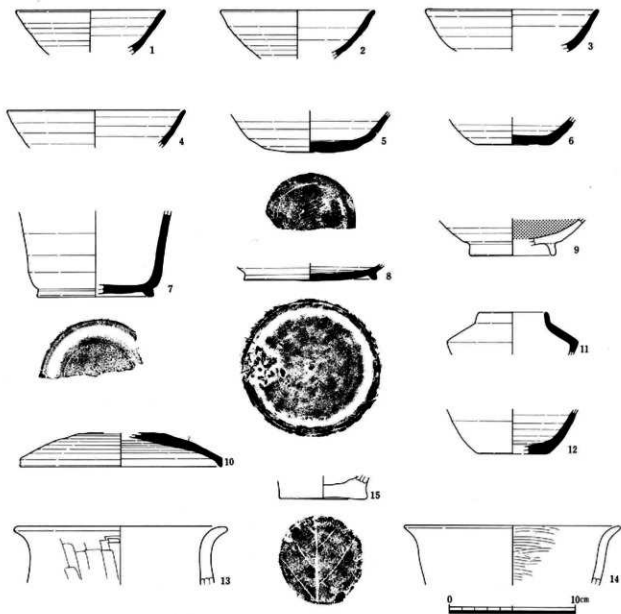


図7 1号住居址出土土器実測図

2号住居址

遺構 (図8)

検出状況：A区東側で検出された住居址で、南壁際の一部を検出したのみで大部分が調査区域外となり詳細は不明である。3号住居址を切って構築されている。

形状・規模：確認された東西軸の長さは3.60mほどで隅丸方形もしくは隅丸長方形プランが予想される。

覆土：以下の5層に分層される。1層—黒褐色土層、少量の炭化物を含む。2層・3層—黄褐色砂質土層。4層—暗褐色土層、炭化物・土器片をかなり含む。5層—暗褐色土層、地山と思われる黄褐色土をブロック状に含む。

床面・壁：床は地山の黄褐色土をもって床としているようであり軟弱で不明瞭である。また平坦ではなくかな

りの凹凸を有する。壁高は西壁65cm・東壁62cm・南壁70cmと深いが掘りこみは緩やかである。

柱穴：検出されていない。

その他の施設：炉・カマド等検出されていない。

遺物出土状況：出土遺物のほとんどは4～5層にかけて検出されている。

遺物 (図9)

須恵器環・短形壺・甕、土師器環・甕などが出土している。

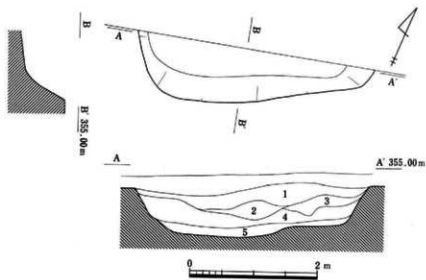


図8 2号住居址実測図

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	土師	環	11.6			1/6	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き	
2	"	"	12.5	5.3	4.2	1/4	外面：ロクロナデ、下端に一定の回転荒削り、内面：荒磨き 底部：回転荒削り	
3	"	"	12.7			1/8	ロクロナデ	
4	"	"	12.6	5.8	4.8	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
5	"	"	13.4	5.8	3.8	1/6	外面：ロクロナデ、下端にて2帯の回転荒削り 内面：荒磨き 底部：回転荒削り	
6	"	"	14.2	6.4	5.3	1/4	外面：ロクロナデ、下端に一定の回転荒削り 内面：荒磨き→ 黒色処理、底部：回転糸切り→回転荒削り	
7	"	"	13.1			1/5	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
8	"	碗	16.8			1/8	外面：横荒磨き 内面：荒磨き→黒色処理	
9	須恵	環	12.4	5.5	4.2	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
10	"	"	13.6	6.5	3.4	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
11	"	"	13.0	6.0	3.2	1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
12	"	"	12.7	5.3	3.7	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
13	"	"	12.9	6.0	3.9	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
14	"	"	12.8	5.5	3.9	1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
15	"	"	12.4			1/3	ロクロナデ	
16	"	短瓶	8.1			1/4	ロクロナデ 内面に自然釉付着	
17	"	甕	17.3			1/8	ロクロナデ	
18	土師	"	13.0	4.4	13.7	1/4	外面：口縁部ロクロナデ、体部 荒削り、内面：ロクロナデ 底部：荒削り	
19	"	"	16.0			1/8	ロクロナデ	
20	"	"	25.6			1/4	ロクロナデ	

表6 2号住居址、出土土器観察表

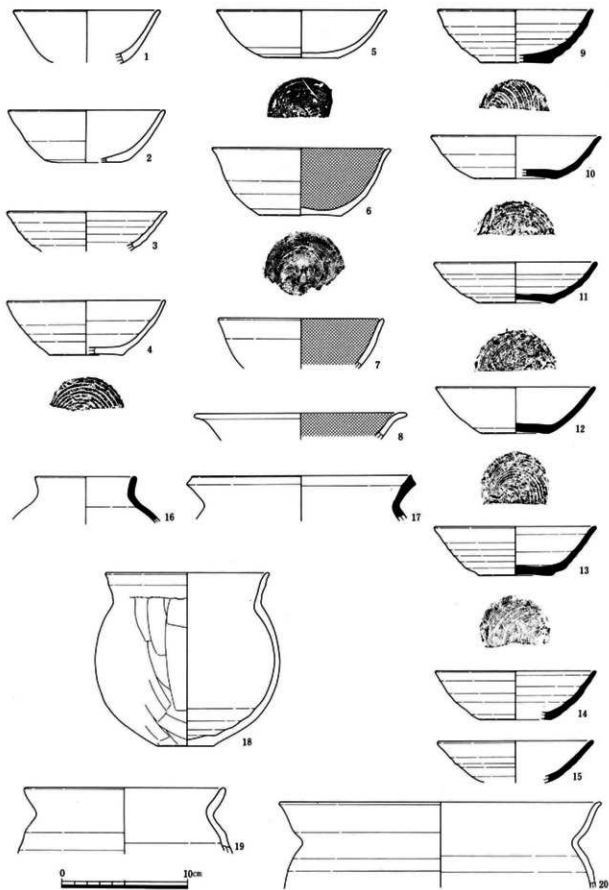


图9 2号住居址出土土器实测图

3号住居址

遺構 (図10)

検出状況：A区東側で検出された住居址でほとんどが調査区域外となる。また南側はガス管等による擾乱を受けている。1号住居址を切って構築され、2号住居址に北側を切られる。

形状・規模：確認された東西軸の長さは4.50mを測り、一辺4.50m程の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-10°-Eである。

覆土：以下の3層に分層される。1層—暗灰褐色土層。若干の炭化物を含む。2・3層との明確な分層は困難で漸移的に移行する。2層—暗灰褐色土層。多量の炭化物・焼土とともに完形に近い土器がかなりの量出土している。3層—灰黄褐色土層。下層に至って遺物含有量が増す。若干の炭化物を含みやや固く締まる。

床面・壁：床面は住居址中央付近(実測図中破線で示した範囲)に張り床がなされており非常に堅緻である。壁際は全体に張り床が認められず、張り床部分より一段階低くなって地山面にいたるがこの部分からもかなりの量の遺物が検出されており、当初より意識的に埋りくぼめられていた可能性もある。壁高は西壁50cm・東壁59cm・南壁49cmほどで埋りこみは直に近いが西壁はややなだらかなである。

柱穴：P1・P2が検出されている。P1は径25cm・深さ13cm、P2は径50cmほどの浅い掘りこみの中に更に径10cm・深さ10cmほどの3個の小ピットを有する。柱穴の配置等は不明といわざるをえない。

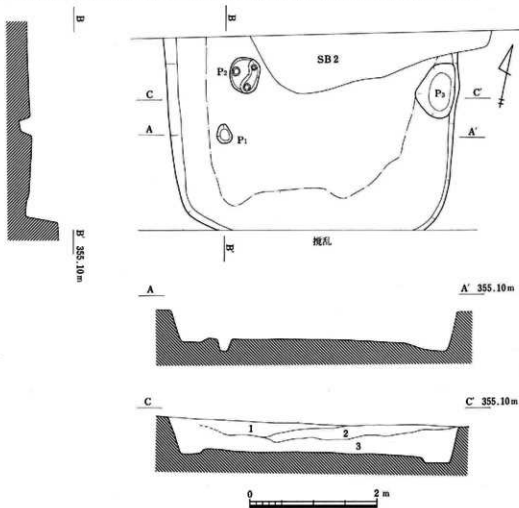


図10 3号住居址実測図

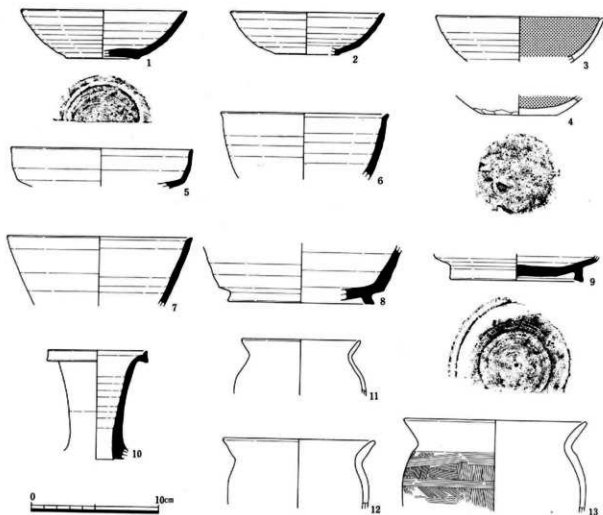


図11 3号住居址下層出土土器

炉・カマド：検出されていないが、住居址西南隅の覆土1層中に径30cm 厚さ5cmほどの焼土塊が検出されている。他遺構が重複していた可能性も考えられる。

その他の施設：P3が検出されている。90×60cmほどの長楕円形を呈し、深さは21cmほどである。

遺物出土状況：覆土2層と3層から大量の土器群が出土している。第3層は下層付近に遺物が比較的集中して出土しており、3号住居址の廃絶時もしくはそれに近い時期の所産と考えられる。第2層は多量の炭化物・焼土の存在することよりすれば、3号住居址の埋没がかなり進行した状況の中で、若干の凹地としてのこされた部分に多量の土器群が一括投棄されるとともに、火が燃やされた状況が推定できる。特に出土土器中に円面硯と多くの墨書土器が存在する点が注目される。この土器群の投棄という行為がいかなる背景のもとでなされたかは推測の域を出ぬが何らかの祭祀的な色合いが強そうである。以下第2層出土土器を3号住居址上層出土土器、第3層出土土器を3号住居址下層出土土器として扱う。

遺物 (図11~15)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	坏	13.0	5.9	3.8	1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り	

表7 3号住居址下層出土土器観察表

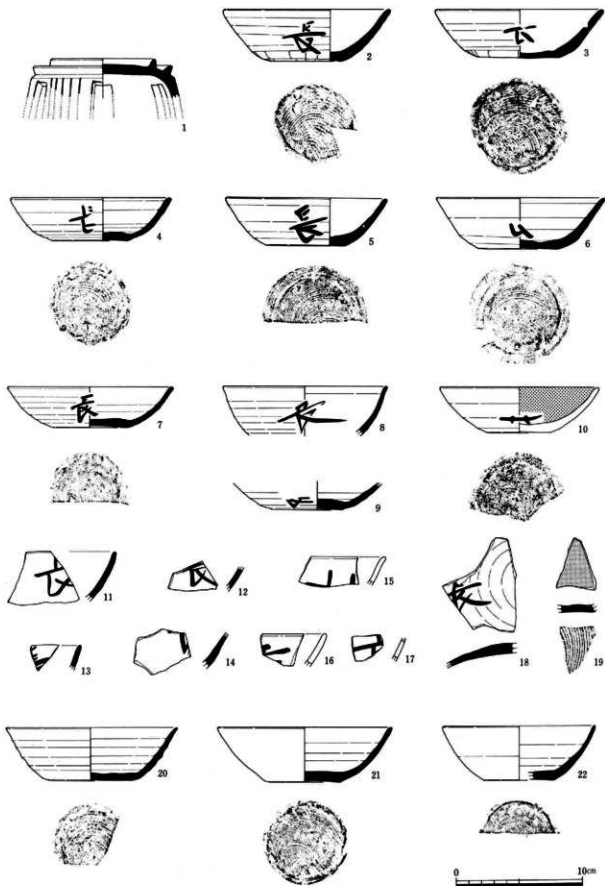


图12 3号住居址上層出土土器実測图①

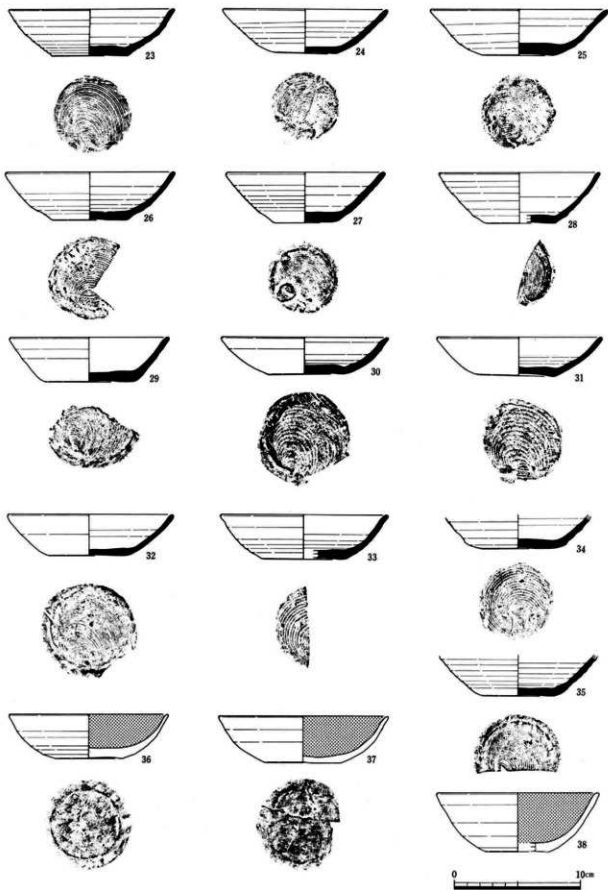


图13 3号住居址上層出土土器実測図②

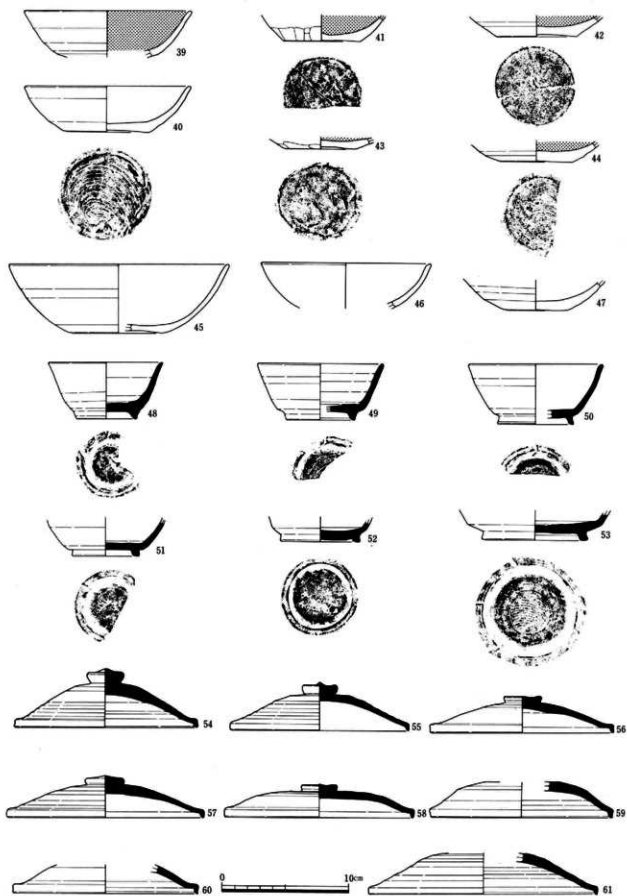


图14 3号住居址上層出土土器実測図③

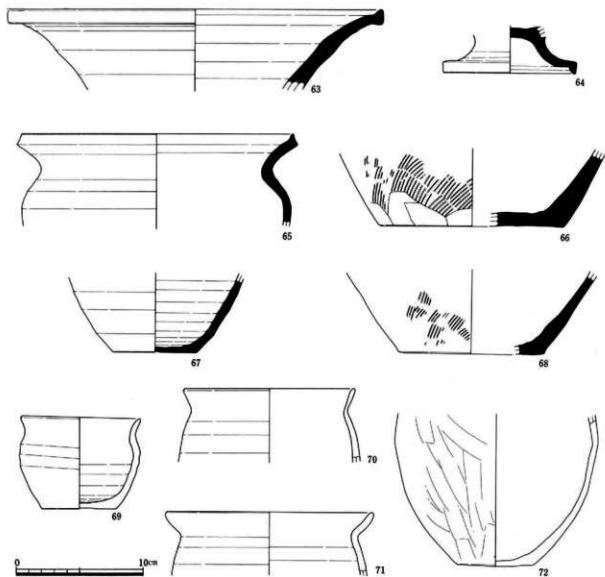


図15 3号住居址上層出土土器実測図④

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
2	〃	〃	12.0	5.1	3.3	1/3	ロクロナデ	
3	土師	〃	13.4			1/5	外面：ロクロナデ 内面に寛磨き→黒色処理	
4	〃	〃		5.8		4/5	外面：ロクロナデ、下端に回転磨削り一帯、内面に寛磨き→黒色処理、底部：静止磨削り	
5	須恵	高台杯	14.2			1/4	ロクロナデ	
6	〃	〃	13.1			1/6	ロクロナデ	
7	〃	〃	14.4			1/5	ロクロナデ	
8	〃	〃		11.4		1/6	ロクロナデ 底部：回転磨削り	
9	〃	〃		10.6		1/3	ロクロナデ 底部：回転磨削り	
10	〃	瓶	7.8			2/3	ロクロナデ 内面に自然釉の付着著しい	
11	土師	甕	9.2			1/5	ロクロナデ	
12	〃	〃	11.8			1/5	ロクロナデ	
13	〃	〃	14.3			1/3	口縁部内外ロクロナデ 胴外面：縦の斜ハケ→カキメ 胴内面：横ナデ	

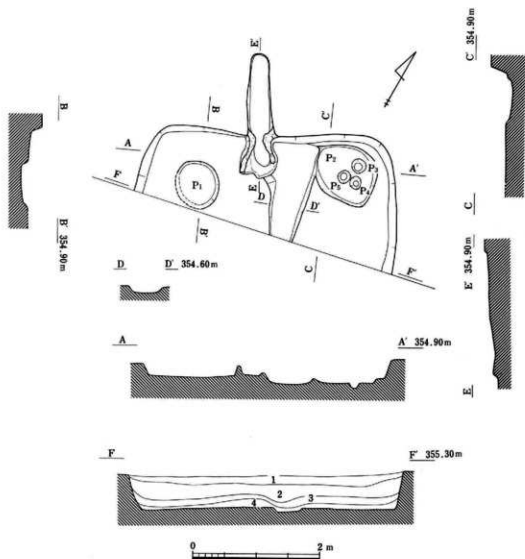
表7 3号住居址下層出土土器観察表

No	種別	器種	法量 cm			依存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	円蓋				1/2		
2	#	坏	13.2	5.8	4.1	2/3	外面：ロクロナデ、下端に静止寛削り2帯 底部分：回転糸切り 火ダスキ有	墨書「長」
3	#	#	13.5	6.5	3.9	2/3	外面：ロクロナデ、下端に静止寛削り1帯 底部分：2回の回転 糸切り 火ダスキ有	#
4	#	#	12.8	6.0	3.4	1/2	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	#
5	#	#	12.8	6.2	3.8	1/2	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 底部分：回転糸切り	#
6	#	#	13.3	6.4	4.1	2/3	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り2帯 底部分：回転糸切り 縁周面を回転寛削り 火ダスキ有	#
7	#	#	13.0	6.0	3.2	1/2	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	#
8	#	#	12.8			1/5	ロクロナデ	#
9	#	#		5.6		2/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	#
10	土師	坏	12.6	5.0	3.6	1/3	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：寛磨き→黒色 処理 底部分：回転糸切り→回転寛削り	墨書「#」
11	須恵	#				1/10	ロクロナデ	墨書「長」
12	#	#					ロクロナデ	#
13	#	#					ロクロナデ	#
14	#	#					ロクロナデ	# ?
15	土師	#					外面：ロクロナデ 内面：寛磨き→黒色処理	墨書「？」
16	#	#					外面：ロクロナデ 内面：寛磨き→黒色処理	墨書「長」
17	#	#					外面：ロクロナデ 内面：寛磨き→黒色処理	#
18	須恵	蓋				1/8	天井部回転寛削り2帯	#
19	#	坏					ロクロナデ 底部分：回転糸切り	内面に朱墨付 着
20	#	坏	13.5	7.4	4.2	1/4	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
21	#	#	13.6	6.0	4.3	2/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
22	須恵	坏	11.9	5.7	4.3	1/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
23	#	#	13.2	6.2	3.7	1/4	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
24	#	#	12.8	5.2	3.5	2/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
25	#	#	14.0	5.6	3.6	2/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
26	#	#	13.2	6.0	3.8	1/2	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
27	#	#	12.4	5.2	4.0	1/2	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
28	#	#	12.6	5.6	4.0	1/4	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
29	#	#	12.4	7.0	3.5	1/4	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
30	#	#	13.0	6.0	3.0	3/4	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
31	#	#	12.9	6.0	3.1	1/1	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
32	#	#	12.8	6.4	3.3	1/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
33	#	#	13.0	6.8	3.5	1/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
34	#	#		5.8		1/2	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
35	#	#		5.8		1/3	ロクロナデ 底部分：回転糸切り	
36	土師	坏	12.6	5.1	3.5	1/3	外面：ロクロナデ、下端に回転寛削り1帯 内面：寛磨き→黒色 処理、底部分：回転寛削り	

表8 3号住居址上層出土土器観察表①

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
37	#	#	13.4	6.0	3.7	1/2	外面：ロクロナデ 内面：甃磨き→黒色処理 底部：静止寛削り	
38	#	#	13.0	5.0	4.7	1/4	外面：ロクロナデ、下端に回転寛削り1帯、内面：甃磨き→黒色処理 底部：回転寛削り	
39	#	#	13.4			2/3	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：甃磨き→黒色処理	
40	#	#	13.0	6.8	3.6	3/4	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
41	#	#	6.1			1/2	外面：ロクロナデ 下端に静止削り 内面：甃磨き→黒色処理 底部：寛削り→静止寛削り	
42	#	#	6.3			1/2	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：甃磨き→黒色処理 底部：回転寛削り	
43	土師	坏	5.7			2/3	外面：静止寛削り 内面：甃磨き→黒色処理 底部：静止寛削り	
44	#	#	5.7			1/2	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：甃磨き→黒色処理 底部：回転糸切り→回転寛削り	
45	#	#	17.5	7.2	5.4	1/4	外面：口縁部甃磨き 体部ロクロナデ、下端に回転寛削り1帯 内面：甃磨き 底部：回転寛削り	
46	#	#	13.4			1/6	外面：ロクロナデ 内面：甃磨き	
47	#	#	5.0			2/3	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：甃磨き 底部：回転寛削り	
48	須恵	高杯	9.1	4.8	4.5	2/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り→ナデ	
49	#	#	10.0	5.4	4.5	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
50	#	#	10.6	6.0	4.8	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り？ 外面に自然釉付着	
51	#	#	5.4			1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
52	#	#	6.3			1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り→回転寛削り	
53	#	#	8.4			1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り→周辺部回転寛削り	
54	#	蓋	14.7	4.7		1/3	ロクロナデ 天井部回転寛削り2帯	
55	#	#	14.2	3.8		1/4	ロクロナデ 天井部回転寛削り2帯 内面に自然釉の付着著しい	
56	#	#	14.6	2.9		1/2	ロクロナデ 天井部回転寛削り2帯	
57	#	#	15.8	3.3		1/2	ロクロナデ 天井部回転寛削り2帯	
58	#	#	14.8	2.6		1/3	ロクロナデ 天井部回転寛削り2帯	
59	#	#	14.4			1/3	ロクロナデ 天井部回転寛削り3帯	
60	#	#	14.8			1/5	ロクロナデ	
61	#	#	18.0			1/4	ロクロナデ 天井部回転寛削り 内面に自然釉の付着著しい	
62	#	甕	29.2			1/10	ロクロナデ	
63	#	高盤	10.4			4/5	ロクロナデ	
64	須恵	甕	21.4			1/4	ロクロナデ	
65	#	#	14.5			1/5	外面：平行タタキ→底部周辺のみ削り 内面：ナデ 底部：糸切り→ナデ	
66	#	#	6.6			1/4	外面：ロクロナデ 下端に回転寛削り1帯 内面：ロクロナデ 底部：回転寛削り	
67	#	#	11.6			1/8	外面：平行タタキ→底部周辺のみナデ 底部ナデ	
68	土師	甕	9.5	5.8	7.3	3/4	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
69	#	#	13.4			1/4	ロクロナデ	
70	#	#	16.2			1/6	ロクロナデ	
71	#	#	6.0			1/2	外面：斜 or 縦方向の寛削り、内面：ナデ 底部：静止寛削り	

表 8 3号住居址上層出土土器②



4号住居址

図16 4号住居址実測図

遺構 (図16)

検出状況：A区中央付近で検出された住居址である。半分以上が調査区域外となり、また南端遺構上面にガス管等が通り、床面にまでは攪乱は及ばぬものの詳細は不明な部分が多い。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模：確認された東西軸の長さは4.05mを測り、一辺4m程の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-29°-Wである。

覆土：覆土は以下の4層に分層される。1層—暗茶褐色土層。遺物・炭化物等はほとんど含まない。2層—黄茶褐色土層。3層—暗茶褐色土層。地山と思われる黄褐色土がブロック状に混入する。遺物の包含量ももっとも多い。4層—暗黄褐色土層。いずれの層も非常に固く締まった状態でやや砂質を帯び粘性は少ない。

床面・壁：床は黄褐色の地山層をもって床面としているようで、張り床等の施設は認められない。また全体に軟弱である。壁高はセクションで確認したかぎりでは東壁・西壁ともに55cm前後と深く掘りこみは直に近い。

柱穴：主柱穴に該当するようなピットは検出されていない。

カマド：北壁中央やや西よりのところに存在する。遺存状況は非常に悪く、袖部が若干と煙道が検出されている。粘土製の両袖型と思われるが詳細は不明である。火床には焼土塊の堆積が認められたがさほど焼き締まった

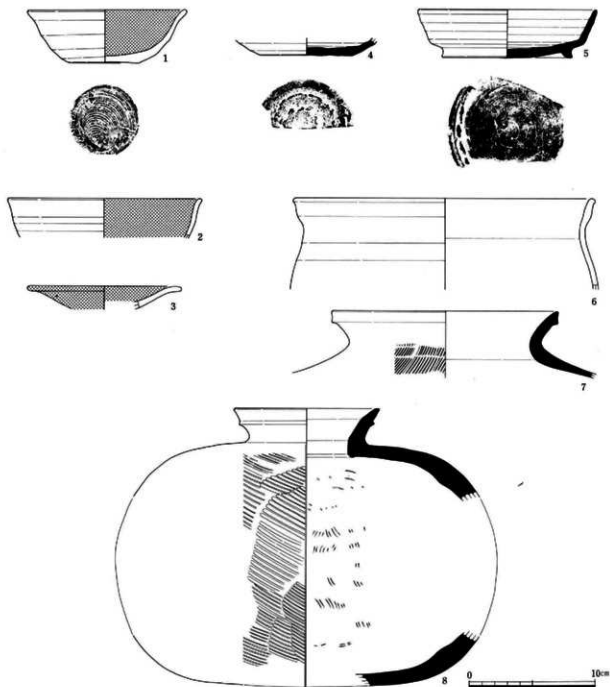


図17 4号住居址出土土器実測図

状態ではない。

その他の施設：P1～P5のピットが検出されている。P1は長径70cm・深さ10cmであるが西側は擾乱のため不明である。P2は径1.0m・深さ6cm。P3～P5はP2内に検出されたもので、いずれも径17～20cm・深さ7cmほどのものである。P1の上には床面よりやや浮いた状態で人頭大の粘土塊が2個並んだ状態で検出されている。ともに黄灰白色を呈し粘土内には小石や砂粒が混入されており土器製作用の粘土と考えられる。このことよりすればP1には貯蔵穴的な機能が想定される。カマド東側に北壁から住居中央にむけて溝状の落ち込みが検出されている。遺物等の出土も認められず性格は不明である。

遺物出土状況：遺物のほとんどは覆土3層よりの出土であるが、坏1と横瓶8は覆土2層より出土している。

遺物 (図17)

No.	種別	器種	法量 cm			遺存度	成型・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	12.6	5.6	4.2	1/1	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理 底部：回転糸切り	
2	#	#	15.4			1/8	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
3	#	皿	12.2			1/6	内外面：荒磨き→黒色処理	
4	須恵	坏	7.2			1/2	ロクロナデ 底部：回転荒切り	
5	#	高坏	14.2	10.4	3.8	1/3	ロクロナデ 底部：回転荒削り	
6	土師	甕	24.0			1/6	ロクロナデ	
7	須恵	#	18.0			1/4	口縁部：ロクロナデ 体部外面：平行タタキ 体部内面：ナデ	
8	#	横瓶	11.5	22.1		1/2	口縁部：ロクロナデ 体部外面：平行タタキ 体部内面：同心円文→ナデ	

表9 4号住居址出土土器観察表

5号住居址

遺構 (図18)

検出状況：A区中央付近で検出された住居址で半分以上が調査区域外となり、詳細は不明である。

形状・規模：確認された東西軸の長さは3.40m程で、一辺3.50m前後の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-21°-WもしくはN-69°-Eである。

覆土：本住居址覆土ととらえられるのは2層～4層である。2層—砂質暗灰褐色土層。若干の炭化物の混入が認められる。3層—暗褐色土層。炭化物・土器片等が顕著に認められ、やや固く締まる。4層—砂質暗灰褐色土層。地山と思われる黄褐色土がブロック状に混入している。以上の2～4層はレンズ状の水平堆積を示し、自然堆積が想定される。5層は砂層であり、地震等によってできた地割れ面に砂が流入し形成されたものと考えられる。1層は暗褐色土層、6層は砂質の褐色土層とともに耕作等による攪乱層である。

床面・壁：床面は張り床がなされ壁際はやや軟弱なものの全体に固く締まっている。壁高はセクションによって確認したかぎりでは東壁・西壁ともに50cm前後とやや深く掘りこみは直に近い。

灰・カマド：検出されていない。

柱穴：主柱穴と考えられるものは検出されていない。

その他の施設：住居址東南隅にP1が検出されている70×55cm・深さは11cmほどである。

遺物出土状況：覆土2～4層から普遍的に出土しているが量的には少なく、

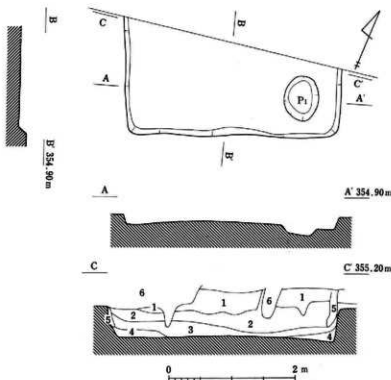


図18 5号住居址実測図

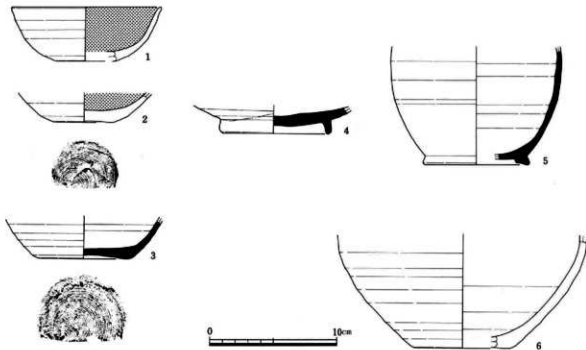


図19 5号住居址出土土器実測図

床面出土資料も小破片が多い。

遺物 (図19)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成型・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	12.0	4.7	4.3	1/3	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理	
2	#	#		4.9		1/2	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理 底部：回転糸切り	
3	須恵	#		7.1		2/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
4	灰釉	椀		8.2		1/2	底部：ナデ 軸は淡け掛け 内面見こみ部に重ね焼きの痕跡有	
5	須恵	瓶		8.2		1/3	外面：ロクロナデ 下半は回転篋磨り 内面：ナデ 底部：回転篋磨り 自然軸付着	
6	土師	鉢		7.9		1/5	ロクロナデ 底部：回転糸切り	

表10 5号住居址出土土器観察表

6号住居址

遺構 (図20)

検出状況：A区中央付近にて検出された住居址で南側は半分以上が調査区域外となる。他遺構との切りあい関係はないが本住居址内より検出されているピット群中には本遺構に直接伴わないものの存在が予想される。

形状・規模：確認された東西軸の長さは5.15mとやや大きく、一辺5m前後の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-71°-Wである。

覆土：検出面以下の残存が少なく確認された覆土は暗褐色土一層であるが上層には薄い炭化物の水平堆積が認められた。本住居址はこの炭化物の堆積層の存在によってその検出が可能となった状況である。

床面・壁：床は地山面をもって床面と把握した。張り床等の施設は認められず全体に軟弱で不明瞭である。検出面からの掘りこみは10~15cm前後と浅い。

柱穴：P1~P10が検出されているがすべてが本住居址に伴うものではない。P1は1.0×0.75mの方形を呈し深さ51cmと大規模な掘りこみである。底面に径20cm・深さ12cmほどの小ピットを2個有する。P2は径45cm・深さ32cm、P3は径80cm・深さ9cm、P4は径80cm・深さ32cm、P5は径40cm・深さ40cm、P6は径40cm・深さ16

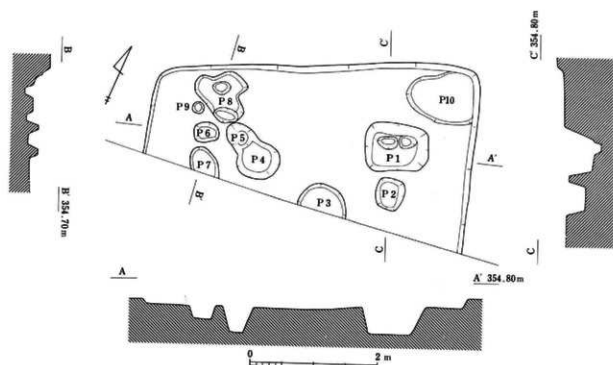


図20 6号住居址実測図

cm、P7は径40cm・深さ12cm、P9は径20cm・深さ16cmである。P8は径80cmほどの不整形な掘りこみで内部に深さ12cmほどの小ピットを2個有する。P10は深さ5cmほどの浅い掘りこみである。掘りこみの規模等からすればP1・P5などが本住居址の主柱穴として把握される可能性が高い。

その他の施設：検出されていない。

遺物出土状況：出土土器は覆土下層～床直上のものがほとんどである。柱穴内からも若干の土器片が出土している。

遺物 (図21)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成型・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	环	13.9	6.1	4.0	2/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り 内外面に火ダスキ有り	
2	#	#	14.0	7.0	4.4	1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り→ナデ?	
3	#	蓋台	14.6	10.7	3.1	1/8	ロクロナデ	
4	#	#	12.5	9.2	3.0	1/2	ロクロナデ 底部：篋削り	
5	#	#	13.3	9.6	3.7	1/4	ロクロナデ 底部：回転篋削り	
6	#	蓋	14.8		2.7	1/3	天井部回転篋削り4帯	
7	#	#	14.8		2.9	1/2	天井部回転篋削り2帯 外面に自然釉付着	
8	#	#				1/3	天井部回転篋削り2帯	
9	#	#	15.2			1/5	天井部回転篋削り2帯	
10	#	#	15.0			1/3	天井部回転篋削り3帯	
11	土師	甕	16.1			1/4	口縁部：ロクロナデ 体部外面：縦篋削り 体部内面：ナデ	
12	#	#	18.6			1/5	体部外面：縦篋削り 体部内面：ナデ	
13	須恵	#	18.8			1/6	ロクロナデ	
14	土師	#	19.8			1/8	口縁部：ロクロナデ 体部外面：篋削り 体部内面：ナデ	

表11 6号住居址出土土器観察表

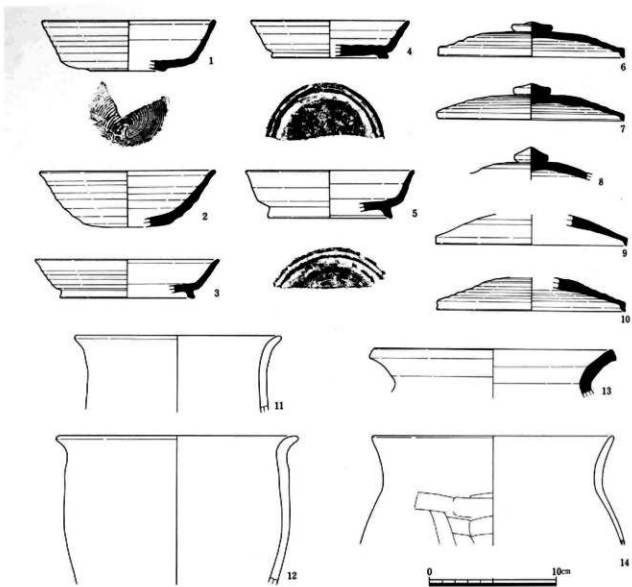


图21 6号住居址出土土器实测图

7号住居址

遺構 (図22)

検出状況：B区中央付近にて検出された住居址である。南壁際の一部を検出したのみで大半は調査区域外となり詳細は不明である。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模：東西軸は確認された範囲では3.80mほどでやや胴張りの隅丸方形もしくは隅丸長方形プランが想定される。

覆土：覆土は以下の8層に分層される。1層—暗茶褐色土層。2層—黄灰褐色土層。3層—暗灰褐色土層。4層—暗褐色土層。5層—淡黄褐色土層。炭化物が若干含まれる。6層—暗灰褐色土層。7層—暗黄褐色土層。炭化物・焼土が多量に含まれ焼失家屋の可能性を推定させる。比較的固く締まった層である。8層—暗茶褐色土層。

床面・壁：張り床等の施設は認められなかったが、壁際のみを検出であり詳細は不明である。壁高はセクションによって確認したかぎりでは東壁・西壁とも60cmほどやや深い。壁の掘りこみはややなだらかなのである。

その他の施設：住居址西南隅に壁周溝が検出されている。幅10～15cm深さ8cmほどのものである。全周はしない。

遺物出土状況：床上より弥生後期の赤彩された壺破片が出土しているのみであり図示しうるものはない。

8号住居址

遺構 (図23)

検出状況：A区西側で検出された住居址で、南側半分ほどは2号溝址によって切られる。

形状・規模：確認された短軸の長さは、3.20mほどで隅丸長方形プランと思われる。主軸はN-46°-Wである。覆土：暗褐色土一層で炭化物を多量に混入する。

床面・壁：床面は住居址中央部を中心に張り床がなされ非常に堅緻であるが、壁際に行くにつれ不明瞭なものとなる。検出面からの掘りこみは浅く

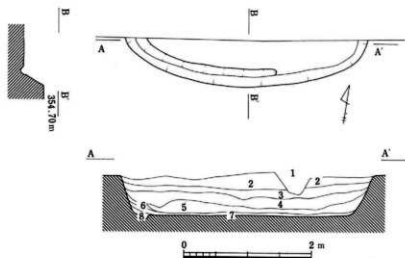


図22 7号住居址実測図

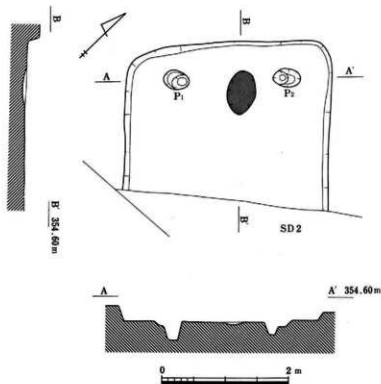


図23 8号住居址実測図

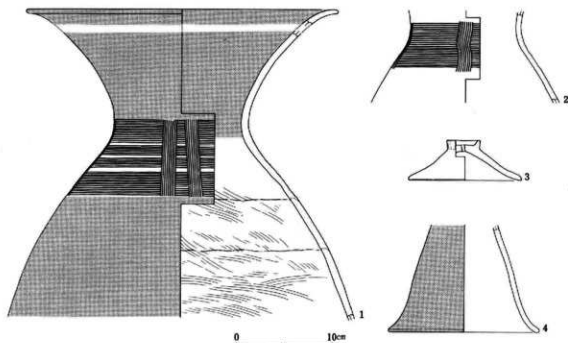


図24 8号住居址出土土器実測図

20～15cmである。

柱穴：P1・P2が検出されている。深さはP1—30cm、P2—21cmでありともに主柱穴と考えられる。他にピットは検出されていないが主柱穴は4本長方形配列が想定される。

炉：奥壁側主柱穴間中央に1個検出されている。平面形は70×45cmほどの楕円形を呈し、3cmほどのレンズ状に掘りくぼめられている。炉底面はかなり固く焼き締まっており、炭化物・焼土の堆積が確認されている。

その他の施設：検出されていない。

遺物出土状況：住居址西隅、P1と壁との間の床面上に壺形土器の胴中位以上が正位の状態出土している。また出土土器はほとんどが床面上からの出土である。

遺物 (図24)

壺(1・2) 1は口径33cm・残存高32.5cmで胴部中位以下を欠損する。口縁部は朝顔状に大きく外開し、胴部は比較的強く張る形態を呈する。頸部文様は6帯の直線文を上から下の順序で施文したのち2本一對の縦方向の直線文を一周に4ヶ所施文し柵描T字文を構成する。施文原体はいづれも同一である。頸部文様帯部分をのぞく外面全面と口縁部内面は篋磨きされ赤彩される。胴部内面は斜方向のハケ整形後雑なナデ整形がなされるが粘土帯接合痕を比較的顕著にとどめる。住居址北西隅から床面に接した状態で出土したものである。2は頸部付近の破片である。頸部文様は4帯の直線文を上から下の順序に施文したのち一周に4ヶ所縦方向の直線文を施文しT字文を構成するものと思われる。施文は非常に雑なものである。外面は文様帯部分をのぞいて比較的丁寧に篋磨きされるが赤彩はされない。内面は器面の剥落が激しく詳細は不明である。

蓋(3) 端部を若干欠損するがほぼ完形品である。笠形を呈しつまみ部は指頭による押捺で立ち上がらせている。頂部中央には径3mmほどの焼成前穿孔が一孔なされている。体部外面は縦方向の、内面は横方向の比較的丁寧な篋磨きで仕上げられる。口径12.0cm・器高4.2cmである。

高環(4) 脚部破片で底径16.0cmである。外面上半は縦方向、端部付近は横方向の篋磨きがなされ赤彩される。内面はナデ整形で仕上げられる。

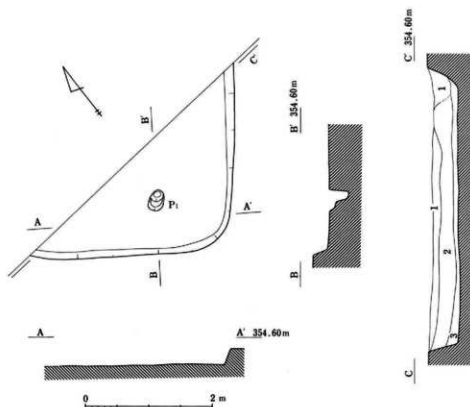


図25 9号住居址実測図

9号住居址

遺構 (図25)

検出状況：A区西側に検出された住居址で、北側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模：規模等確認しえないが一辺4.0m前後の隅丸方形住居址であろうか。

覆土：以下の3層に分層される。1層—暗褐色砂質土層。粘性少なく締まる。若干の炭化物が混入している。2層—黄褐色土層。粘性やや強く、炭化物・土器等ほとんど含まない。3層—黄褐色土層。多量の炭化材・焼土粒を含む。

床面・壁：床面は全体に張り床がなされ非常に堅緻である。床面上には多量の炭化材が遺存しており焼失住居と考えられる。壁高はセクションから東壁・西壁ともに50cmほどである。掘りこみはやや緩やかである。

柱穴：P1が検出されているのみである。30×20cmほどの楕円形を呈し、深さは29cmを測る。主柱穴の一つと考えられる。他の施設等は検出されていない。

遺物出土状況：若干の土器小破片が出土しているのみで図示しうるものはない。

10号住居址

遺構 (図26)

検出状況：B区中央付近で検出された住居址である。南側ほどが調査区域外となる。他遺構との切りあい関係はない。B区で検出された唯一の住居址である。

形状・規模：確認された東西軸の長さは4.40mほどで、一辺4.50mほどの隅丸方形プランが予想される。主軸

はN-35°-Wである。

覆土：暗茶褐色土一層であるが部分的に炭化物を多量にまじえる。

床面・壁：床は住居址中央北壁側（実測図中破線で示した範囲）にのみ堅緻な張り床が認められた。壁際に行くにつれて不明瞭で軟弱なものになる。検出面からの掘りこみは20cm程である。東壁・西壁の掘りこみは直に近いが、北壁はやや緩やかである。

柱穴：壁際にP1～P5が検出されている。深さはP1—24cm・P2—26cm・P3—29cm・P4—21cm・

P5—20cmである。東壁側P1～P3は比較的規則的な配置が認められる。

その他の施設：北壁中央付近に焼土と炭化物が集中して検出されており、破壊されたカマドと思われるが詳細は不明である。

遺物出土状況：ほとんどが覆土内からの出土である。

遺物 (図27、28)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成型・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	土師	坏	12.4			1/6	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
2	"	"	11.8			1/8	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
3	"	"	12.4			1/6	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
4	"	"	12.6	5.6	3.4	1/6	外面：ロクロナデ→丸削り 内面：荒磨き→黒色処理 底部：回転糸切り	
5	"	"	12.6			1/4	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
6	"	"	13.6			1/4	外面：ロクロナデ、下端に回転丸削り1帯 内面：荒磨き→黒色処理	
7	"	"	16.0			1/5	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
8	"	"	15.0			1/6	外面：ロクロナデ 内面：荒磨き→黒色処理	
9	"	"		5.6		1/6	外面：ロクロナデ、下端に回転丸削り1帯 内面：荒磨き→黒色処理 底部：回転丸削り	
10	"	碗	18.2	7.4	6.5	1/4	外面：積層磨き→黒色処理、内面：荒磨き→黒色処理 底部：回転丸削り	
11	"	"	6.6			1/3	外面：雑な荒磨き、内面：荒磨き、底部：ナデ	
12	"	"	5.8			1/2	外面：荒磨き→黒色処理、内面：荒磨き→黒色処理 底部：回転糸切り	
13	"	"	6.4			1/2	外面：荒磨き→黒色処理、内面：剥落のため不明 底部：回転丸削り	底部に刻書有

表12 10号住居址出土土器観察表①

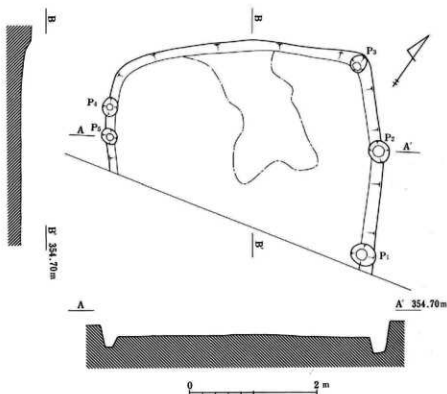


図26 10号住居址実測図

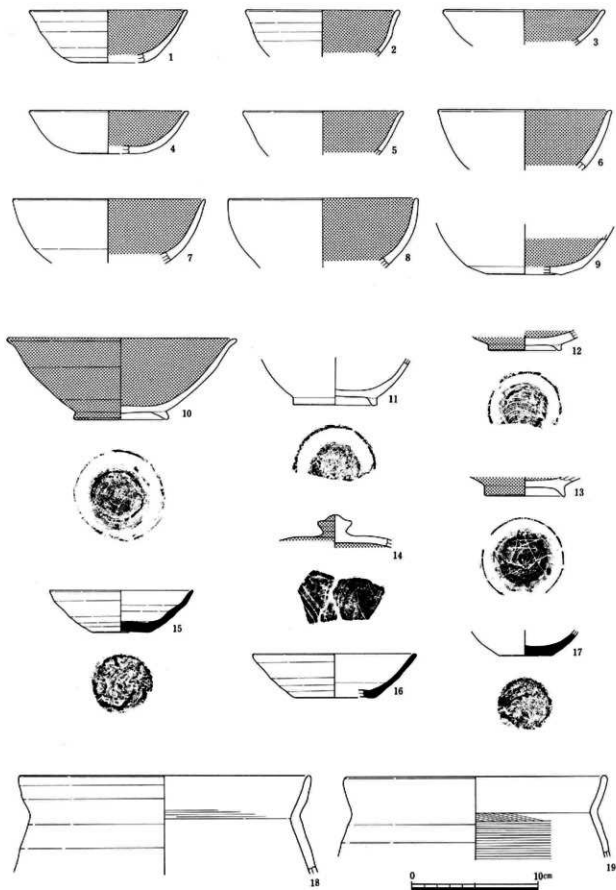


图27 10号住居址出土土器实测图①

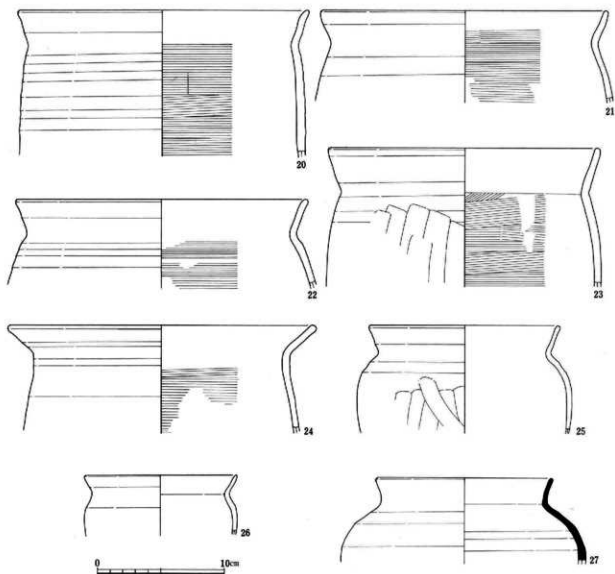


図28 10号住居址出土土器実測図②

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
14	#	蓋					内外面寛磨き→黒色処理	内面に線刻有
15	須恵	環	11.4	4.6	3.3	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り?→静止削り	
16	#	#	12.4	6.4	3.5	1/5	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
17	#	#		4.0		2/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り→ナデ	
18	土師	甕	23.0			1/8	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ、頸部付近にカキメ	
19	#	#	20.4			1/8	ロクロナデ 胴部内面：カキメ	
20	#	#	23.0			1/6	ロクロナデ 胴部内面：カキメ	
21	#	#	22.6			1/6	ロクロナデ 内面：カキメ	
22	土師	甕	23.0			1/8	ロクロナデ 内面：カキメ	
23	#	#	21.6			1/5	外面：ロクロナデ→胴部縦削り 内面：カキメ	
24	#	#	24.0			1/5	ロクロナデ 内面：カキメ	
25	#	#	15.0			1/5	外面：ロクロナデ→胴部縦削り 内面：ナデ	

表12 10号住居址出土土器観察表②

No	種別	器種	法量 cm		遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径			
26	#	#	11.8		1/3	ロクロナデ 内面：ナデ	
27	須恵	#	13.8		1/6	ロクロナデ	

表12 10号住居址出土土器観察表③

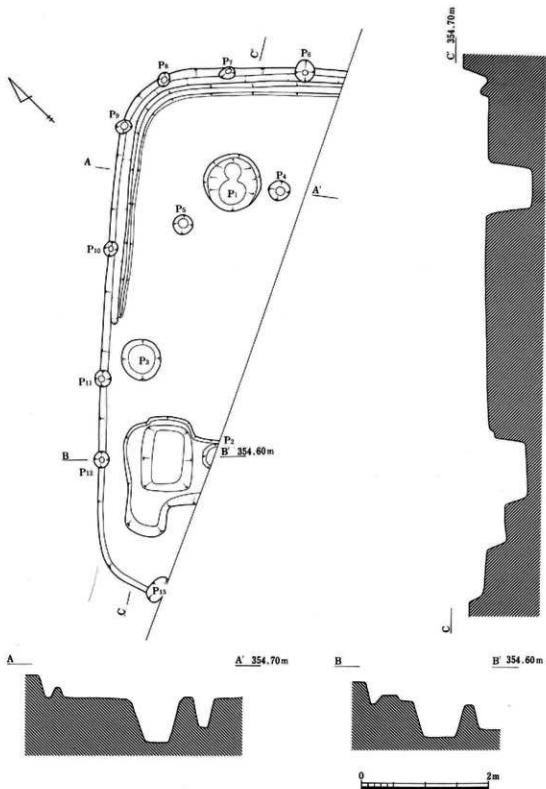


図29 11号住居址実測図

11号住居址

遺構 (図29)

検出状況：C区東側で検出された住居址で、南側は大半が調査区域外となる。他遺構との切りあい関係はない。形状・規模：確認された東西軸は8.30mで、一辺8.50m前後のやや大型の隅丸方形プランを呈するものと思われる。主軸はN-52°-Wである。

覆土：比較的締まりのある暗褐色土一層で、微妙な色調の差異により二層に分層できそうであるが明らかにしえなかった。

床面・壁：床は住居址中央付近を中心に張り床がなされ非常に堅緻であるが、壁際は不明瞭で軟弱なものとなる。壁高は北壁・26cm、東壁・38cm、西壁・18cmほど掘りこみはいずれも直に近い。

柱穴：P1～P13が検出されている。主柱穴と考えられるものはP1とP2である。P1は径1mほどの円形を呈し深さは約70cmほどである。内部には2個の掘りこみが検出されている。P2は南側が調査区域外となるが確認された範囲では径40cm深さ42cmを測る。他に床面から検出された柱穴にはP3～P5がある。P3は径60cm・深さ56cm、P4は径35cm・深さ46cm、P5は径30cm・深さ21cmほどである。P6～P12は壁際に設けられた支柱痕で検出面からの深さはP6—55cm・P7—71cm・P8—54cm・P9—56cm・P10—36cm・P11—43cm・P12—33cm・P13—48cmである。径はいずれも20cm前後であるが、かなり深くしっかり掘りこまれている。

その他の施設：P14ならびに壁周溝が検出されている。P14は0.80×1.10mほどのやや不整形の長方形を呈する土塊状の落ち込みで、床面からの深さは59cmである。土器小片が比較的多量に検出されたのみであるが、貯蔵穴的な機能が想定される。壁周溝は北壁中央付近から東壁際に検出された。幅10～15cm、深さ10cm前後である。周溝内側には幅10cm高さ12cm程の土塁状の高まりが確認されており、周溝の機能向上を図ったものと想定される。埴は確認されていないが住居址中央付近から焼土塊が検出されている。

遺物出土状況：P14付近に床直上あたりから比較的多量に土器が出土しているが量的には多くない。

遺物 (図30)

壺(1～5) 1は頸部以下を欠損するが口縁部はほぼ完形で、口径21.6cmである。口縁部は端部に内湾ぎみに立ち上がり、外側に粘土帯を貼り付けて複合口縁を形成する。口縁部外面と内面は軽い横篋磨きがなされ、外面口頸部間は縦方向のハケ整形後篋磨きされる。2は有段口縁部の破片である。内外面とも丁寧に篋磨きされ赤彩される。3は小型品で胴上半以上を欠損する。底径は4.6cmである。胴下半を緩やかにくびれて小さめの底部に取約する形態を呈する。内外面とも篋削り後ナデ整形で仕上げられる。また底部も篋削りがなされる。

甕(6・7) 6は完形品で口径11.6cm・底径3.9cm・器高11.2cmを測る。口縁部は頸部よりくの字状に内湾ぎみに立ち上がり、端部は丸く終る。口縁部は内外面とも強い横ナデによって仕上げられる。外面胴中位は粗い不定方向のハケ整形がなされ、胴下半は斜方向の細かい篋削りがなされる。底部は篋削りで仕上げられる。胴部内面は全体に丁寧なナデ整形がなされる。7は底部付近を欠損する。口径11.4cm。口縁部は頸部よりくの字状に外反して終る。外面口縁部は強い横ナデ、胴部は篋削り後比較的丁寧な縦方向の篋磨きがなされる。内面口縁部は横篋磨きされ胴部は篋による平滑化後雑なナデ整形がなされる。

鉢(8・9) 8は口径12.0cm・底径3.8cm・器高6.6cmである。口縁部は外反ぎみに短く立ち上がって終り、体部は肩部で強く張り以下底部へ直線的に取約する形態を呈する。外面口縁部は強い横ナデ後、体部はハケ整形後横篋磨きされ、底部は篋削りで仕上げられる。内面口縁部は横篋磨き、体部は篋による平滑化後横篋磨きされる。

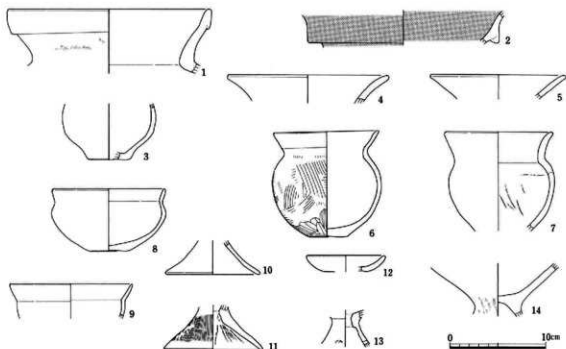


図30 11号住居址出土土器実測図

9は口径13.0cmで、口縁部は頸部内面に鋭い稜を形成して内湾ぎみに立ち上がる。内外面とも比較的丁寧な篋磨きで仕上げられる。

高坏（10・14）10は底径10.0cmで外面は篋磨きされ内面はナデ整形される。14は脚の接合部付近に縦方向のハケ整形痕を残すか内外面とも全体に丁寧な篋磨きがなされる。

器台（11-13）11は脚部のみで底径10.4cmである。外面は縦方向のハケ整形痕を顕著に残し、内面は篋による平滑化後ナデ整形される。12は器受け部破片で口径は8.2cmである。内外面とも篋磨き整形される。13は脚部破片で円形の透かし孔が3個存在する。外面は篋磨きされ、内面は雑なナデ整形がなされる。

12号住居址

遺構（図12）

検出状況：C区中央付近で検出された住居址で南側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。

形状・規模：調査範囲が狭く規模等詳細不明。確認された範囲での東西軸は5.5mほどで一辺6m前後の隅丸方形プランが予想される。主軸はN-51°-Eである。

覆土：以下の4層に分層される。1層—暗茶褐色土層。やや粘性が強く固く締まる。2層—灰茶褐色土層。土質は1層と同様であるが1層から3層への漸移層ととらえられる。3層—暗灰褐色土層。4層—暗灰褐色土層。地山の黄褐色土がブロック状に混入する。

床面・壁：床は全体にはっきりせず地山面をもって床面ととらえた。全体に軟弱である。壁高は北壁28cm・東壁33cmほどで北壁側の掘りこみは直に近いが東壁は全体になだらかである。

柱穴：P1～P4が検出されている。P1・P2はともに不整形を呈する掘りこみでP1は80×50cm・深さ30cm、P2は80×60cm深さ37cmほどである。P2東方には更に深さ10cmほどの方形の落ち込みが検出されているが性格は不明である。P3・P4は壁際に設けられた支柱痕でP3は径30cm・深さ16cm、P4は径25cm・深さ36

cmである。

その他の施設：検出されていない。

遺物出土状況：4層を中心に土器が出土している。

遺物 (図33)

壺(1~3) 1は有段口縁壺形土器の口縁部破片で口径22.0cmである。口縁端部は面とりされ若干上方に立ち上がる。外面は縦方向のハケ整形後横篋磨きされ、内面も篋磨きで仕上げられる。2は頸部以下を欠損するが口径17.0cmである。口縁端部外面に一部の粘土帯を貼りつけ複合口縁を形成する。複合口縁部の端部は面とりされナデ整形される。外面は粗いハケ整形後軽く篋磨きされ内面は横篋磨きされる。3は口径16.9cmで内外面ともいねいに篋磨きされ赤彩される。

甕(4・7~9) 4は口縁部のみで口径17.0cmである。頸部からくの字状に強く外反し、端部には強い横ナデが加えられる。外面は斜方向のハケ整形後強くナデられ、内面は横方向のハケ整形痕を顕著にとどめる。

埴(5) 口縁部破片で口径11.0cmである。頸部から内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し端部はとがりぎみに終る。内外面とも丁寧な篋磨きで仕上げられる。

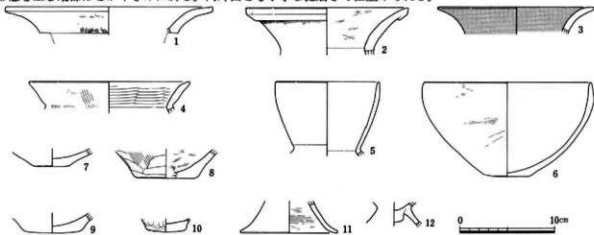


図32 12号住居址出土土器実測図

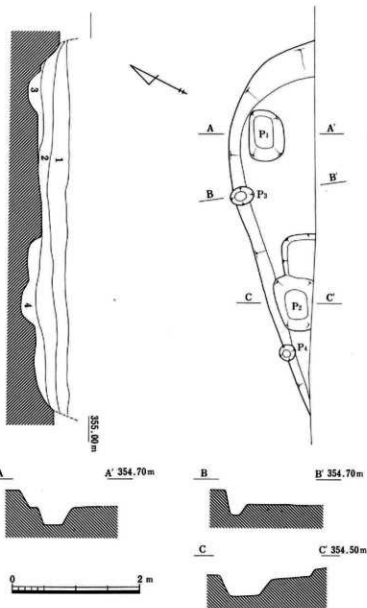


図31 12号住居址実測図

鉢(6) 口径17.5cm・底径4.8cm・器高9.9cm。口縁部付近で内湾ぎみに立ち上がる形態を呈し内外面とも比較的丁寧な篋磨きで仕上げられる。底部も篋削り後篋磨きで仕上げられる。

高坏(11・12) 11は底径10.3cmで外面は篋磨き、内面は横ハケ整形後ナアられる。

13号住居址

遺構 (図33)

検出状況：C区中央付近から検出された住居址で、北側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。18号土壌に東端を切られる。

形状・規模：調査範囲が狭く規模等詳細不明。4.5mほどの長さが検出されているが、一辺5m前後の隅丸方形プランが想定される。

覆土：以下の5層に分層される。1層一暗茶褐色土層。2層一暗褐色土層。地山と思われる黄褐色土をブロック状に混入する。3層一暗灰褐色土層。粘性あり。4層一暗灰褐色土層。黄褐色土が多量に混入する。5層一暗灰褐色土層。

床面・壁：床面は全体に貼り床がなされ堅緻である。壁高は南壁で22cm程を測り掘りこみは直に近い。

柱穴：P1・P2が検出されている。ともに壁際に設けられた支柱痕で、検出面からの深さはP1—34cm・P2—39cmとやや深い。

その他の施設：P3ならびに壁周溝が検出されている。P3は東側壁際に検出された落ち込みで深さ20cmほどである。出土遺物もなくその性格は不明である。周溝は南壁下に検出されている。幅は平均15cmほどで、深さは5cmほどである。

遺物出土状況：覆土内より土器片が若干出土しているのみであり、図示しうるものはない。

14号住居址

遺構 (図34)

検出状況：C区中央付近で検出された住居址で、南側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。19号土壌

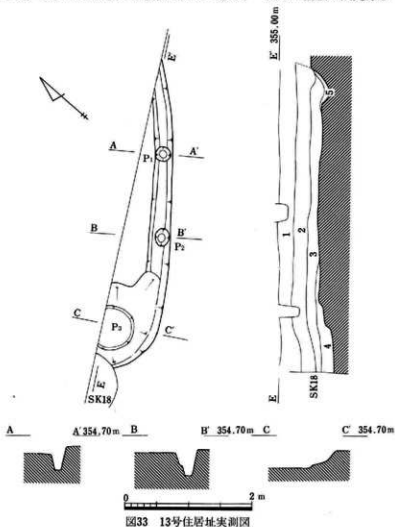


図33 13号住居址実測図

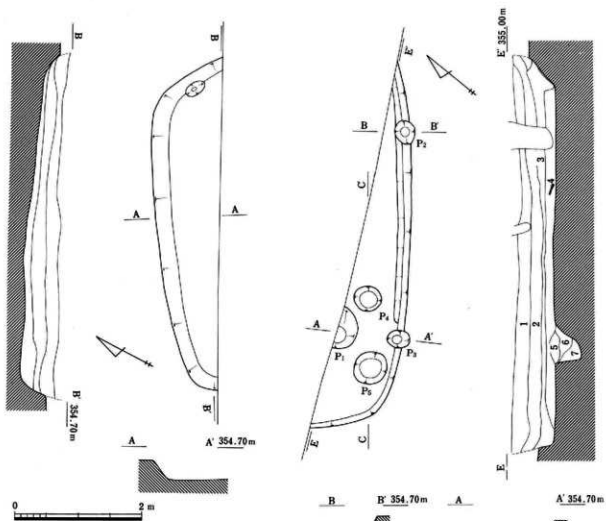


図34 14号住居址実測図

のうえに構築されている。

形状・規模：調査範囲が狭く詳細は不明であるが、一辺5m前後の隅丸方形もしくは隅丸長方形プランが想定される。

覆土：以下の3層に分層される。1層—暗黄茶褐色土層。粘性がありやや軟質である。2層—暗灰茶褐色土層。3層—灰茶褐色土層。やや砂質を帯び固く締まる。黄褐色土がブロック状に混入する。

床面・壁：床は壁際のせいか全体に不明瞭で軟弱である。壁高は35cmほどやや深いか掘りこみはなだらかである。

柱穴：北東隅にP1が検出されている。深さ15cmである。

遺物出土状況：若干の土器破片が出土しているが図示しうるものはない。床面上より太形蛤刃石斧の欠損品が一点出土している。

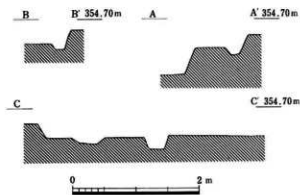


図35 15号住居址実測図

15号住居址

遺構 (図35)

検出状況：C区中央付近で検出された住居址で、北側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模：調査範囲が狭く確認できないが、一辺6mほどの隅丸方形もしくは隅丸長方形プランが想定される。主軸はN-52°-Eである。

覆土：基本的に以下の4層に分層される。1層—暗茶褐色土層。2層—暗灰褐色土層。3層—青灰褐色土層。4層—暗褐色土層。地山の黄褐色土をブロック状に混入する。

床面・壁：床面は貼り床がなされているがさほど堅緻な状況ではない。壁高は南壁22cm・西壁21cmほどである。

柱穴：P1～P3が検出されている。

P1は半分が調査区域以外であるが径60cm深さ42cmである。P2は径30cm・深さ30cm、P3は径25cm・深さ28cmである。P1は主柱穴と考えられ位置からすると4本方形配列もしくは長方形配列が想定される。P2・P3は壁支柱と考えられる。

その他の施設：南壁際に壁周溝が検出されている。幅10cm・深さ15cmほどであり全周はしない。P4は径45cm・深さ20cm、P5は径56cm深さ7.5cmである。

遺物出土状況：覆土2層を中心に出土しているがいずれも小破片で図示しうる資料はない。

16号住居址

遺構 (図36)

検出状況：C区西側で検出された住居址で、南側は半分以上が調査区域外となる。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模：確認された東西軸の長さは6.50mで、長軸6.50mほどの隅丸長方形プランと考えられる。主軸は

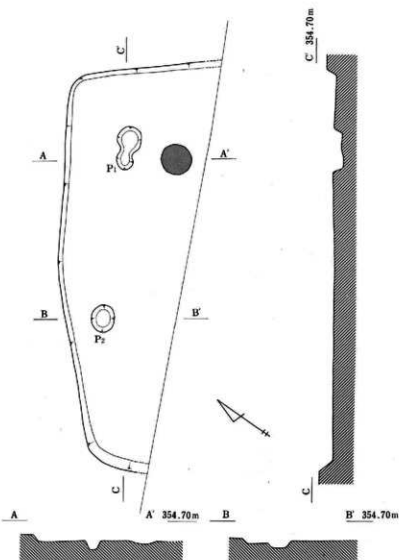


図36 16号住居址実測図

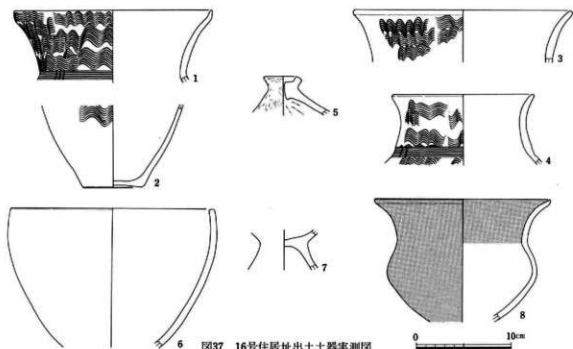


図37 16号住居址出土土器実測図

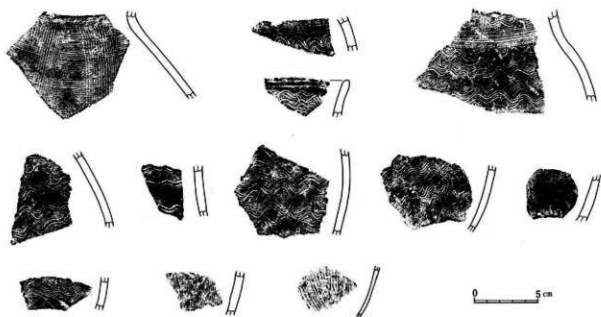


図38 16号住居址出土土器拓影

N-55-Eである。

覆土：やや砂質を帯びた暗茶褐色土層一層である。

床面・壁：床は全体に貼り床がなされ非常に堅緻であるが、壁際はやや軟弱なものとなる。壁高は北壁14.7cm・東壁12.7cm・西壁21cmである。掘りこみはいずれもややなだらかである。

柱穴：P 1とP 2が検出されている。P 1は二つの掘りこみがあり深さは14cmである。P 2は径35cm・深さ10cmである。ともに主柱穴と考えられ、柱穴配置は4本長方形と考えられる。

炉：東側柱穴間中央に1個検出されている。5cmほどレンズ状に掘りくぼめられた地床がで底面は固く焼き締まっており、炭化物・焼土が堆積していた。

遺物出土状況：ほとんどが覆土内からの出土である。

遺物 (図37)

甕(1-4) 1は頸部以下を欠損し口径21.0cmである。口縁部は端部にて内湾ぎみに立ち上がり受け口状を呈する。外面には4帯の櫛描波状文を基本的には上から下の順序に施文するが、部分的に後の描きたし箇所も存在する。波状文施文後に頸部に3連止めの簾状文を施文する。内面は軽い横篋磨きがなされるが、ハケ整形痕を残す。2は胴中位以上を欠損する。底径6.2cm。胴部には波状文が施文され、以下縦方向の丁寧な篋磨きがなされる。また底部も丁寧に磨かれる。内面は横篋磨きである。3は口縁部破片で口径23.2cmである。外面には波状文を施文し、内面は丁寧な横篋磨きで仕上げられる。外面の波状文は各施文帯ごとに施文順序を変えているようである。4も口縁部破片で口径15.0cmである。外面は口縁部から胴部まで上から下の順序に波状文を施文したのち、頸部に2連止めの簾状文を施文している。内面は丁寧な横篋磨きで仕上げられている。

蓋(5) 笠形を呈するが端部を欠損する。頂部中央には焼成前穿孔が一孔なされる。外面は縦方向のハケ整形、内面は篋による平滑化後ナデ整形される。

鉢(6) 底部を欠損するが口径21.5cmとやや大型品である。口縁端部はやや内傾ぎみに面取りされる。内外面とも丁寧な篋磨きによって仕上げられる。

高坏(7) 脚部接合部の破片である。内外面とも篋磨きされるが、赤彩はされない。脚内面はナデ整形される。

台付鉢(8) 脚部を欠損するが、形態は台付甕と同様のものと考えられる。口径18.7cm・胴部最大径15.8cmで口縁部に最大径を有する。口縁端部は強く横ナデされることによって若干立ち上がる。口縁部内外面、胴部外面は篋磨き後赤彩され、胴部内面も篋磨きで仕上げられる。

17号住居址

遺構 (図39)

検出状況: C区西側で検出された住居址で、南側は半分以上が調査区域外となる。他遺構との切りあい関係はない。

形状・規模: 確認された東西軸の長さは4.25mで、短軸4.30mほどの隅丸長方形プランが予想される。

覆土: 暗茶褐色土一層である。

床面・壁: 床は全体に貼り床がなされ、壁ぎわにいたるまで堅緻な状況であった。検出面からの壁高は5~10cmと浅い。

柱穴: P1~P4が検出されている。P1・P2は主柱穴と考えられ、深さはP1—14cm・P2—21cmである。大半が調査区域外となり詳細は不明だが、P1・P2を奥壁側の主柱穴とする4本長方形の柱穴配置が予想される。P3・P4は壁際に設けられた支柱であろうか。深さはP3—18cm・P4—10cmである。

炉: P1・P2間中央やや内側

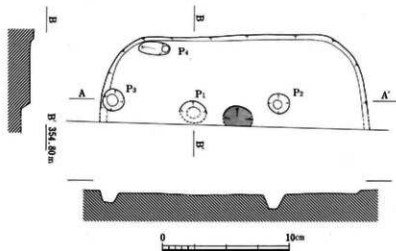


図39 17号住居址実測図

のところに検出された。径45cmほどの地床がで5cmほど掘りくぼめられ、炭化物の厚い堆積が認められた。

遺物出土状況：土器小破片が若干出土したのみで図示しうる物はない。

2号土墳

遺構 (図40)

検出状況：A区東側で検出された土墳で、北側は調査区域外となり南側は一部を1号土墳に切られる。

形状・規模：確認された短軸は2.0mを測り2.0×3.0mほどの長楕円形プランが想定される。壁高はセクション面で確認したかぎりでは東壁・西壁ともに60cmほどでやや深く直に近く掘りこまれている。土墳底面には1.45×0.90m・深さ8mほどの不整形円形状の掘りこみが検出されているが特別出土遺物もなく性格は不明である。

遺物出土状況：6・7・10層よりの出土が主体であるが出土量は少ない。南隅2層より獣骨（肋骨）が出土している。

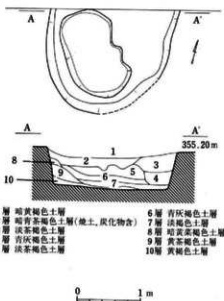


図40 2号土墳実測図

遺物 (図41)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・地文		備考
			口径	底径	器高				
1	須恵	坏	13.6	7.4	3.8	1/4	ロクロナデ	外面下端に静止篔削り1帯 底部：静止篔削り	
2	"	"	14.5			1/5	ロクロナデ		
3	"	高台	12.8	10.0	3.5	1/4	ロクロナデ	底部：回転篔削り	
4	"	"		9.5		3/4	ロクロナデ	底部：回転糸切り→回転篔削り	
5	"	蓋	14.7		3.2	1/2	ロクロナデ	天井部回転篔削り3帯	
6	"	"	14.0			1/3	ロクロナデ	天井部回転篔削り2帯	
7	土師	甕	15.0			1/6	ロクロナデ		

表13 2号土墳出土土器観察表

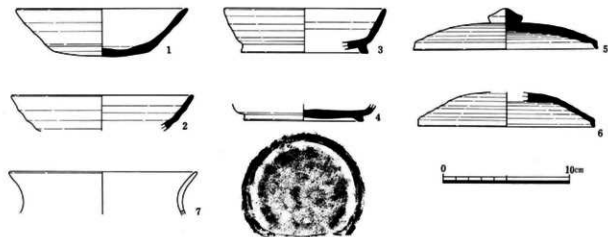


図41 2号土墳出土土器実測図

5号土壙 (井戸址)

遺構 (図42)

A区中央付近で検出された井戸址で北側は若干が調査区域外となるがほぼ完掘しえた。

径1.25mの円形プランで深さ1.15mである。

覆土内から大きな板石2枚と一頭分の馬骨が出土している。ともに墳底からはかなり浮いた状態にあり、井戸廃絶後かなりの時間を経た後に投棄もしくは落ち込んだものと考えられる。特に下に検出された板石は幅80cm・長さ80cmほどの大きなものではほぼ直立した状況で出土している。馬骨はちょうどこの石を取り囲むような状態で出土しており、中手骨ならびに中足骨はこの石の上に乗っており、さらに中足骨の上にもう一枚の板石が覆っている状況からすれば、井戸廃絶後板石が直立した状態で埋まり、その後に馬が投棄されさらに若干の時間を経てその上に板石が置かれたことが考えられる。馬は東向きに横転して、首を後方に倒した状態で出土している。前後の脚・寛骨等は非常に遺存状況が良いが、頸椎や肋骨部分はもろい状況であった。

また頭骨もややもろいものの比較的原形をとどめていた。頭骨に関しては、故意に打ち割られて脳髓が抽出されたような痕跡は認められず、また他の部位についても解体されたような痕跡は認められない。

覆土内から散在する形で須恵器坏も数点出土しているが出土状況からは副葬品の性格は考えられず、この馬が人為的に遺棄されたのか否かにわかに決しえない。

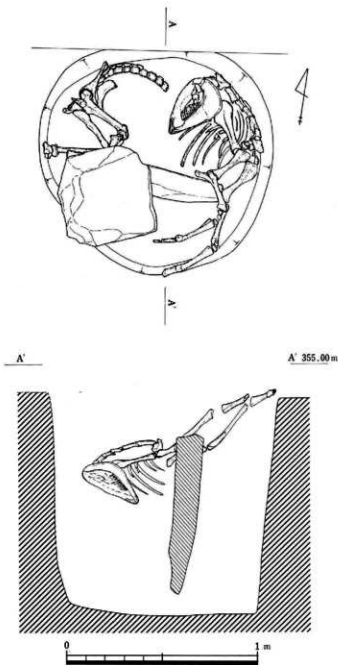


図42 5号土壙実測図

遺物 (図43)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	坏	13.6	4.6	4.5	2/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り→周囲を静止彫削り 火ダスキ有り	
2	〃	〃		5.3		1/2	ロクロナデ 底部：静止彫削り	
3	〃	高杯	12.4	8.9	3.6	1/3	ロクロナデ 底部：回転彫削り 外面に自然軸付着	

表14 5号土壙出土土器観察表

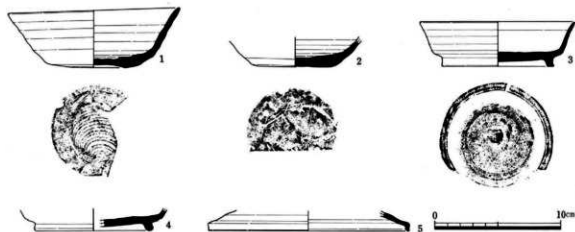


図43 5号土壇出土土器実測図

No	種別	器種	法量 cm 口径 底径 器高	遺存度	成形・調整・施文	備考
4	#	#	9.4	1/3	ロクロナデ 底部：回転荒削り	
5	#	蓋	15.8	1/10	ロクロナデ	

表14 5号土壇出土土器観察表

15号土壇 (井戸址)

遺構 (図44)

C区東側で検出された径0.84mほどの円形の掘りこみで井戸址と考えられる。深さ約1mのところまで調査したが、以下湧水のため調査を中断した。上面には井戸址廃絶後投げ込まれたと考えられる河原石が検出されている。若干の須恵器破片が出土しているのみで図示しうる遺物はない。

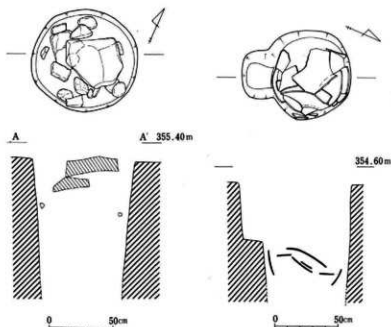


図44 15号土壇実測図

図45 12号土壇実測図

12号土壇 (井戸址)

遺構 (図45)

B区東側で検出されたもので、径0.

70mほどの円形の掘りこみで井戸址と考えられる。深さは1.50mほどまで調査したが以下湧水が著しく調査を中断した。南側には20×45cmほどの方形の張り出しが認められるが性格は不明である。覆土中位以下に須恵器大甕が、壊されて投棄された状態で出土した。胴中位以上はほぼ整形に復元しうるものである。他に須恵器や土師器の坏が数点出土しているが、いずれも覆土中位～上位にかけてのものである。

遺物 (図46)

No	種別	器種	法量 cm 口径 底径 器高	遺存度	成形・調整・施文	備考
1	須恵	甕	58.4	4/5	外面：斜方向の平行タタキ 内面：ナデ	

表15 12号土壇出土土器観察表

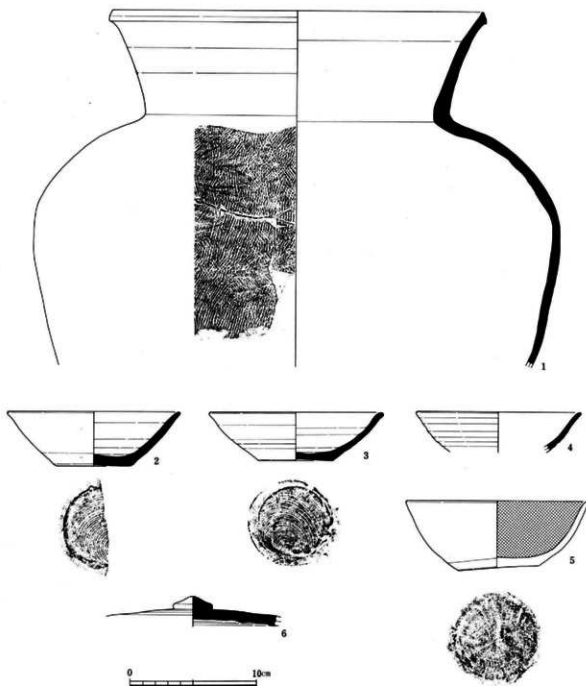


図46 12号土壇出土土器実測図

No.	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
2	"	坏	13.8	6.0	4.3	1/3	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
3	"	"	13.8	5.8	3.8	1/2	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
4	"	"	13.0			1/8	ロクロナデ	
5	土師	"	14.4	6.3	5.3	2/3	外面：ロクロナデ、下端に回転篋削り、内面：篋磨き→黒色処理 底部：回転篋削り	
6	須恵	蓋				1/6	ロクロナデ 天井部回転篋削り	

表15 12号土壇出土土器観察表

14号土壌

遺構 (図47)

C区東側で検出された土壌で、西側を6号溝址に切られる。平面プランは径1.40mほどの円形を成し、深さ50cmほどの掘り鉢状を呈する。覆土は暗黄褐色土一層で炭化物を比較的多量に含んでいた。

遺物 (図47)

1は壺口縁部破片で口径6.9cmである。口縁部が短く開いて終る形態の細頸壺である。内外面ともハケ整形後ナデ整形される。2も壺破片と思われる棒状工具による縦方向の羽状文が施文される。

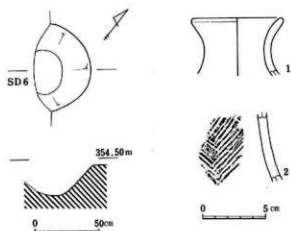


図47 14号土壌出土土器実測図

19号土壌

遺構 (図48)

C区中央付近にて検出された土壌で、14号住居址に切られ南側は若干が調査区域外となる。平面プランは径1.20mほどのやや不整な円形を呈する。深さは約80cmで掘りこみはやや緩やかである。墳底よりやや浮いた状態ではほぼ完形の高環1と用途不明の石製円盤(図66)が出土している。

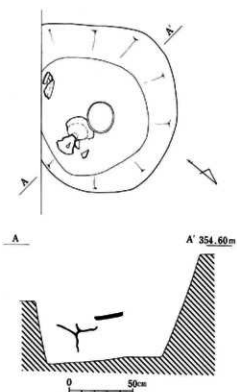


図48 19号土壌実測図

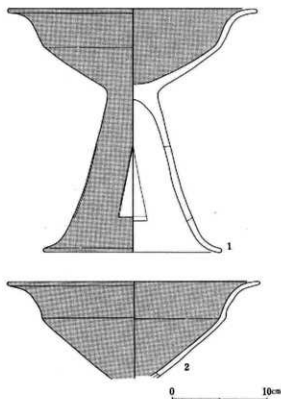


図49 19号土壌出土土器実測図

遺物 (図49)

高坏が2個出土している。1はほぼ完形品で口径26.3cm・坏部中位屈曲部径18.5cm・脚端部径18.8cm・器高25.7cm・脚高16.8cmを測る。坏部は中位で緩やかに屈曲して立ち上がり、端部に近く強く外反する形態を呈する。脚部は高く大きく外開し端部にてさらに外反の度合いを強める。坏部内外面・脚部外面は丁寧に篋磨きされ赤彩される。脚内面は端部付近に強い横ナデが施されるが、他は全体に横方向の篋削りで仕上げられている。脚部には長三角形の透かし孔を全体で4か所に施す。2は坏部の破片でほとんど残存する。口径26.6m・坏部中位屈曲部径19.3cmである。坏部中位で屈曲する形態を呈するが、1に比べて屈曲はやや鋭く外面に明瞭な稜を形成する。また口縁部の外反もやや緩やかである。内外面とも篋磨きされ赤彩される。

23号土壌

遺構 (図50)

C区西側で検出されたもので、北側は大半が調査区域外となり詳細は不明である。平面プランは径0.80mほどの円形であろうか。検出面からの掘りこみは12cmほどと浅く覆土は暗茶褐色土一層である。狭い調査範囲ではあるが、壊底に接した状態で壺と高坏が出土している。

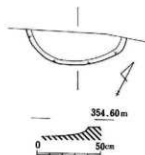


図50 23号土壌実測図

遺物 (図51)

1・2は接合はしないか同一個体である可能性が高い。口径33.0cmである。口縁部は朝顔状に大きく外反し端部は丸く終る。胴部はやや強く張る形態を呈する。頸部文様は6帯の直線文を上から下の順序に施文した後、3本一対の縦方向の直線文一周に4か所施文しT字文を構成する。口縁部内外面と文様帯部分をのぞく外面は篋磨きされ赤彩される。胴部内面はハケ整形後ナデ整形されているようだが剝落が激しく詳細は不明である。3は

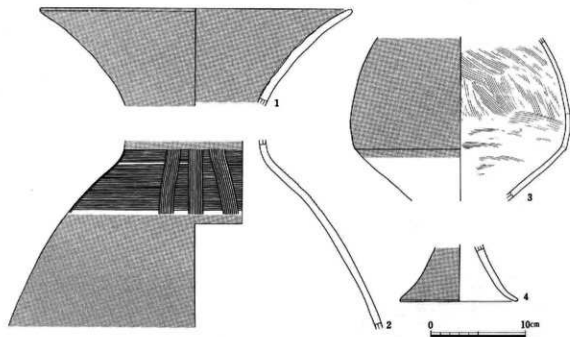


図51 23号土壌出土土器実測図

胴部破片で、胴下半でぐびれ以下底部へ直線的に取附する形態を呈する。内面はハケ整形痕を顕著に残す。4は高坏の脚部で脚端部径12.7cmである。外面は縦方向の磨き後赤彩され、内面は横ナデ整形される。

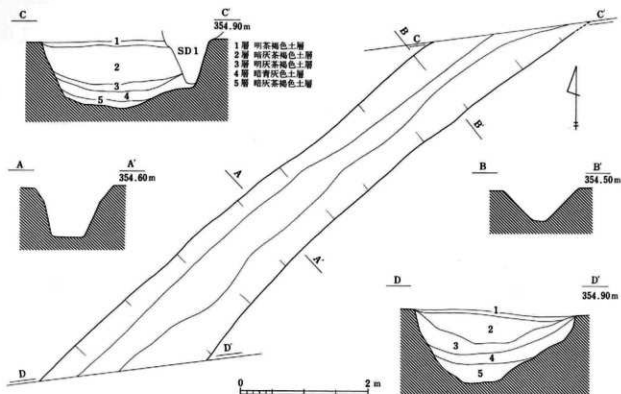


図52 2号溝址実測図

2号溝址

遺構 (図52)

検出状況：A区西側に検出された溝址で、北側と南側はともに調査区域外となる。8号住居を切って構築され北東端は1号溝址に切られる。

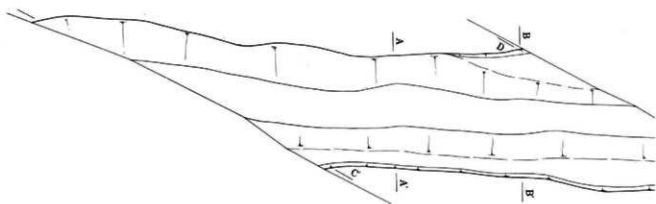
形状・規模：北東から南西方向へ直線的に伸びる溝址で、中軸線の主軸はN-53°-Eを測る。約8mほどの範囲が検出されており、掘りこみ面における幅は平均して1.30m前後、深さは1m前後のしっかりした造りの溝址である。溝底幅は南西側で平均50cm前後、北東側で30cm前後と南西側に行くにつれて広がる。また溝底のレベルは南西側に行くにしたがって漸次低くなり、北東端と南西端では20cmほどの比高差がある。掘りこみの形状は一概ではないが全体としては断面逆台形状を呈する溝址である。溝底面には褐鉄鉱の沈着が著しい。



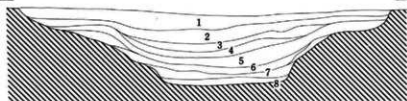
図53 2号溝址出土土器実測図

遺物 (図53)

覆土1・2層を中心にやや大型の土器破片が出土しているが図示しうるのは坏1点のみである。土器器坏で図示した部分のはほぼ完存し、底径7.9cmである。坏部外面は斜方向の削り方で仕上げられ、内面は篋による平滑化後丁寧にナデ整形される。底部は削り後雑な磨きがなされるが、中央部が突出し不安定な形態を呈する。このほか1・2層内より若干の獣骨が検出されている。



C' 354.80m



- | | |
|-----------------|--------------|
| 1 層 暗茶褐色土層(粘性強) | 6 層 暗青灰色粘質土層 |
| 2 層 暗茶褐色土層 | 7 層 暗青灰色粘質土層 |
| 3 層 灰茶褐色土層 | 8 層 暗青灰色粘質土層 |
| 4 層 灰茶褐色土層(粘性強) | 9 層 暗黃褐色砂質土層 |
| 5 層 暗青灰色粘質土層 | 10 層 暗茶褐色土層 |

D' 354.80m



- | | | |
|--------------|--------------|---------------|
| 1 層 黑褐色砂質土層 | 6 層 黑褐色砂質土層 | 11 層 暗青灰色粘質土層 |
| 2 層 暗茶褐色土層 | 7 層 暗茶褐色粘質土層 | 12 層 黃褐色粘土 |
| 3 層 灰褐色土層 | 8 層 黃褐色粘土 | 13 層 暗黃褐色粘質土層 |
| 4 層 黃灰褐色粘質土層 | 9 層 暗青灰色粘質土層 | |
| 5 層 暗茶褐色土層 | 10 層 黃褐色粘土 | |



图 54 4号溝址实测图

4号溝址

遺構 (図54)

検出状況：C区東側で検出された溝址で、北側と南側ともに調査区域外となる。5号溝址を切って構築されている。

形状・規模：北東から南西方向へ直線的に伸びる溝址で、中軸線の主軸はN-50°-Eで、2号溝址とはほぼ平行しており両者の関連が注目される。約8.5m程の長さが検出されているが、掘りこみ面における幅は平均して2.5m前後・深さは1.0~1.2mほどのしっかりした造りの溝址である。溝底幅は平均0.90mほどで、全体としては断面逆台形状を呈する。底面は全体に平坦で大きな比高差は認められない。

遺物出土状況：ほとんどが覆土内からの出土であるが、須恵器環4・5は底面に接した状態で出土している。

遺物 (図55)

No	種別	器種	法量 cm		遺存度	成形・調整・施文	備考	
			口径	底径				器高
1	土師	坏	12.0		1/6	外面：ロクロナデ 内面：甍磨き→黒色処理		
2	"	"	8.6		1/3	外面：ロクロナデ、下端に回転磨削り1帯 内面：甍磨き→黒色処理 底部：回転磨削り		
3	"	"	5.8		1/3	外面：ロクロナデ、下端に回転磨削り1帯 内面：甍磨き→黒色処理 底部：回転磨削り		
4	須恵	"	13.1	9.5	4.3	5/6	ロクロナデ 底部：回転磨削り→ナデ	
5	"	"	14.8	8.5	4.4	4/5	ロクロナデ 底部：回転磨削り?	
6	"	"	13.8	6.6	4.0	1/4	ロクロナデ 底部：回転糸切り	
7	"	"	9.3		1/6	ロクロナデ		
8	蓋	"	13.7		3.0	3/4	ロクロナデ 天井部回転磨削り2帯	
9	瓶	"	6.8		1/1	ロクロナデ 内外面に自然釉の付着著しい		
10	土師	鉢	21.4	7.2	14.4	1/3	外面：上半ロクロナデ、下半回転磨削り、内面：甍磨き→黒色処理 底部：回転磨削り	
11	須恵	瓶	9.2		1/5	ロクロナデ 底部：ナデ		
12	"	甕	23.6		1/10	ロクロナデ		

表16 4号溝址出土土器観察表

6号溝址

遺構 (図56)

検出状況：C区東側で検出された溝址で、北側と南側は調査区域外となる。14号土溝を切って構築されている。

形状・規模：4.30mほどの長さが検出されている。検出面での幅は平均3.20m・溝底幅1.80m・深さ1.10mを測り、断面逆台形状の非常にしっかりした造りの溝である。中軸線の主軸はN-35°-Wである。底面は南側に行くにつれて若干ではあるが低くなる傾向が認められ、北端と南端との比高差は10cmほどである。

遺物出土状況：覆土の堆積状況は一様ではなく、検出された南北のセクションもかなり様相が異なる。ただし基本的に同一なのは1・3・4・7・9層の各層で、出土遺物は9層出土の裏9をのぞいて、基本的には覆土下層の第7層出土ととらえられる。出土状況はほとんどが破損資料であることより、これらの資料は投棄されたものである可能性が高い。

遺物 (図58、59)

壺(1・3~7)1は胴中位以下を欠損するが大型型で、口径38.3cm・頸部径14.5cm・確認できる胴部最大径

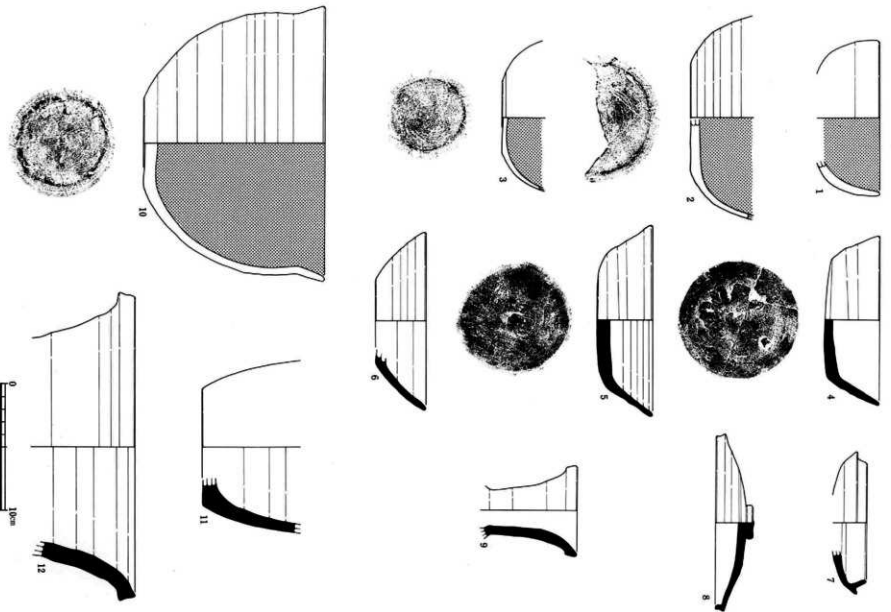


图55 4号遗址出土器类线图

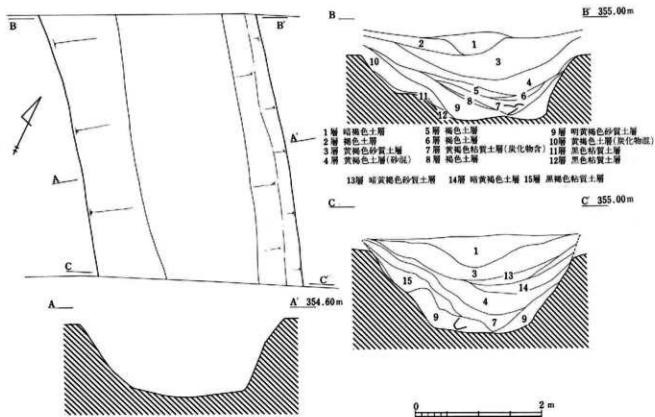


図56 6号溝址実測図

44.8cmである。口縁部は頸部からくの字状に鋭く屈曲して大きく外反し、端部は丸く終る。胴部もかなり球形化している。頸部文様は6帯の櫛描直線文を上から下の順序に施文し、その後2本一對の縦方向の直線文を全体で3か所施文し櫛描T字文を構成する。口縁部内外面と文様帯部分を除く胴外面は篋磨きされ赤彩される。胴部内面は全体に斜面方向の篋磨きで仕上げられるが器面の剥落が激しく詳細は不明である。3は頸部以下を欠損する。口径18.0cm・頸部径9.5cmである。1同様口縁部は頸部よりくの字状に大きく外反する。また胴部もかなり球形化しているものと考えられる。頸部文様は櫛描T字文が施文される。2本一對の縦方向の直線文を全体で3か所施文している。口縁部内外面は丁寧に篋磨きされて赤彩され、胴部内面は強い横ナテ整形で仕上げられる。4は胴部破片で外面は篋磨き、内面はナテ整形されるが赤彩はされない。5は甕形土器の形態を取るものだが、口縁部内外面と胴外面は赤彩される。また胴部内面も軽い篋磨きが加えられる。

壺(2・8・9) 2は口径29.0cm・頸部径23.4cm・胴

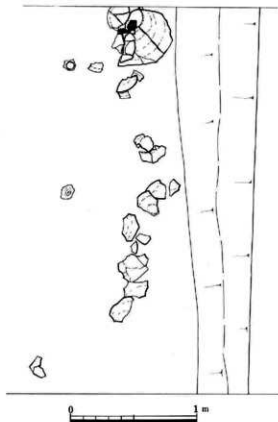


図57 6号溝址土器出土状況実測図

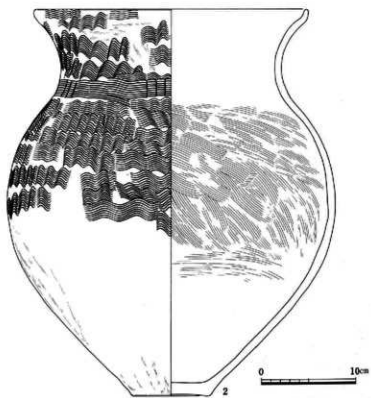
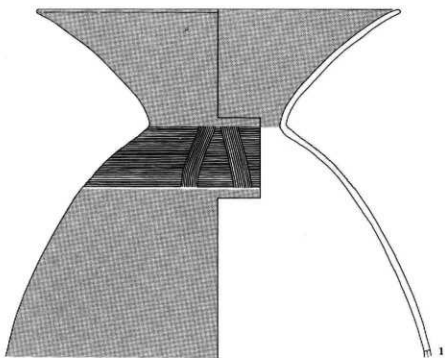


图58 6号清址出土土器实测图①

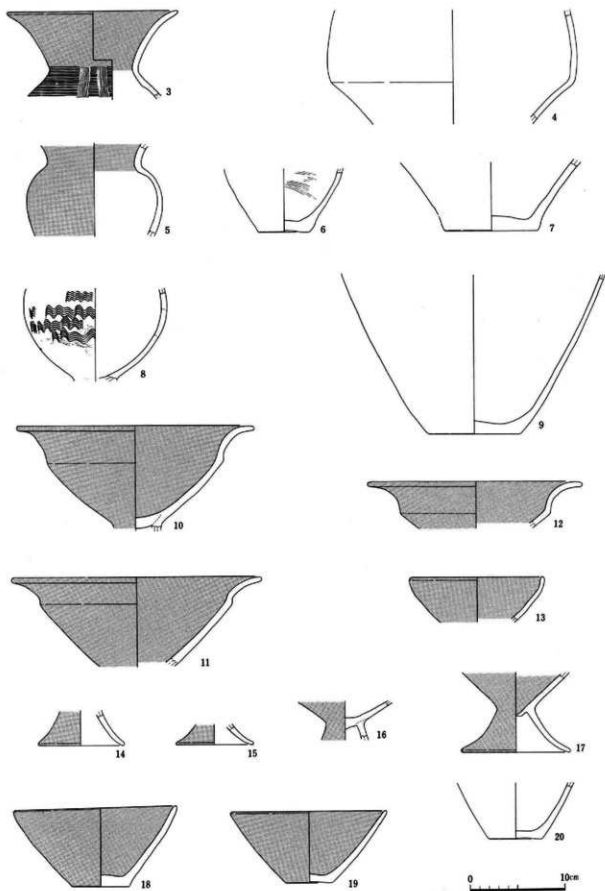


图59 6号溝址出土土器实测图②

部最大径34.7cm・底径8.2cm・器高41.0cmである。口縁部は頸部より緩やかな弧を描いて外反し、端部は内湾ぎみに立ち上がって受け口状を呈する。胴部の球形化も著しく胴中位に最大径を有する。文様は口縁部から胴中位にまで施文される。樽指波状文を口縁部から胴部へ、上から下の順に施文した後頸部に3連止めの簾状文を施文している。外面胴下半は斜方向のハケ整形後丁寧な篋磨きを施すが、部分的にハケ整形痕をとどめる。内面口縁部と胴下半は横篋磨きされるが、胴中位は部分的に篋磨きを加えられるものほとんど斜方向のハケ整形痕をそのままのこす。底部は篋削りによって仕上げられている。8は台付甕で胴下半のみ残存する。外面には波状文が4帯まで確認でき、施文順序は基本的上から下である。下半はハケ整形後雑な篋磨きがなされ、内面は丁寧な横篋磨きで仕上げられる。9は胴下半で、図示した部分はほぼ完存する。底径9.8cmで内外面とも篋磨きされる。

高坏（10-17）10は脚部を欠損するが坏部はほぼ残存する。口径25.2cm・坏部屈曲部径18.7cmである。坏部中位やや上半で屈曲して口縁部が強く外反する形態を呈する。内外面とも篋磨きされ赤彩される。脚部との接合は円盤充填法による。11は口径26.4cm・屈曲部径20.2cmである。10に比較して坏部の屈曲は直線的となり、口縁部の外反も直線的となる。12は口径21.8cm、13は口径13.8cmでいずれも篋磨きされ赤彩される。17は脚部径11.6cmの小型品である。脚部は短くハの字状に大きく開く形態を取る。脚部の接合は円盤充填法によるものと思われる。

鉢（18-20）18は口径17.3cm・底径6.0cm・器高8.2cmである。底部から内湾ぎみに立ち上がる形態で内外面とも篋磨きされ赤彩される。底部は篋削りで仕上げられる。19は口径16.6cm・底径4.9cm・器高7.5cmで坏部は底部から直線的に外開する。また底部は篋磨きで仕上げられる。

その他の遺構（図60・61）

1号土溝

A区東端に位置し、南側は擾乱を受けている。短軸2.0mほどの不整楕円形プランを呈するものと思われる。内部にP1・P2の二つのピットを有するが本遺構に直接伴うものとは思われない。深さはそれぞれ16.8cm、45.9cmである。静止篋削りがなされる須恵器環破片などが出土しているが図示しうるものはない。

6号土溝

A区中央付近で検出されたもので、短軸1.40m、長軸2.20mほどの不整楕円形を呈する。壁高は20cm前後と浅い。須恵器甕・蓋・高台坏などの小破片がかなり出土しているが図示しうるものはない。平安期の所産と思われる。

7号土溝

A区西側に位置する。径0.75mほどの不整形を呈する掘りこみで、深さ1.05mである。井戸的なものと思われるが、他の井戸址に比較して掘りこみがやや浅い。東側に三角形の張り出し部分が検出されているが性格は不明である。出土遺物はない。

8号土溝（井戸址）

A区西側に位置する。径0.80mほどの円形を呈し東側には幅40cm・深さ10cm・長さ2.0mほどの溝状遺構が付設するが、本遺構に直接伴うものか否かは不明である。深さは約1.50mまで掘り下げたが以下湧水が著しく調査を中断した。出土遺物はない。

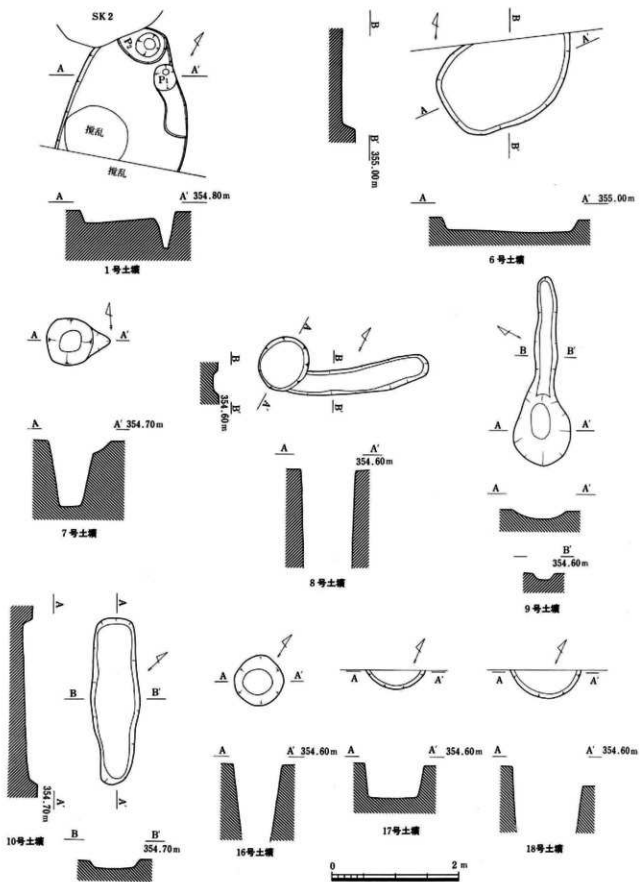


図60 その他の遺構実測図①

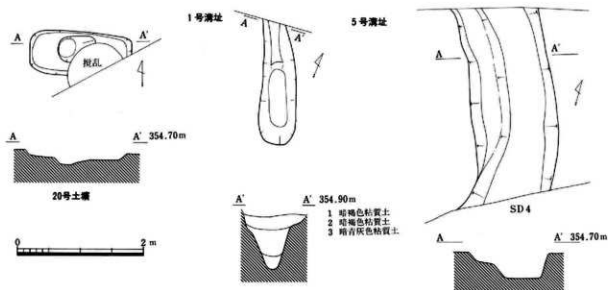


図61 その他の遺構実測区②

9号土壌

A区西側に位置する。径1.0mほどの不整形円形を呈し、深さは10cmほどで断面レンズ状をなす。東側に幅40cm・深さ10cm・長さ1.90mほどの溝状遺構が付設するが、本遺構に直接伴うものか否かは不明である。若干の土師器破片が出土しているが時期等不明である。

10号土壌

A区西側に位置する2.70×0.60mほどの不整形長方形を呈し、深さは10cmほどである。出土遺物はない。

16号土壌 (井戸址)

C区に位置する。径0.80mほどの円形を呈する。深さ約1.20mほどまで掘り下げたが以下湧水が著しく調査を中断する。須恵器の破片などが若干出土しているが時期等詳細は不明。

17号土壌

C区に位置し北側は大半が調査区域外となる径1.0mほどの円形を呈すると思われる。深さは0.50mで掘りこみは直に近い。須恵器・土師器の破片が若干出土しているが時期等詳細は不明。

18号土壌 (井戸址)

C区に位置し13号住居址を切って構築されるが、北側は大半が調査区域外となる。径1.20mほどの円形を呈すると思われる。深さ1.0mほどまで掘り下げたが以下湧水が著しく調査を中断した。出土遺物はない。

20号土壌

C区中央付近に位置し、半分ほどが攪乱を受けている。1.60×0.60mほどの長方形を呈し、内部に深さ5cmほどの小ピットを有するが性格は不明である。深さも全体に10cm前後と浅い。出土遺物はない。

1号溝址

A区に位置する。2号溝址を切って構築されているが北側は調査区域外となる。幅50cm前後で、検出された長さは1.90mほどである。深さは0.90mほどとやや深く断面V字状を呈する。土師器壺小破片が出土しているが時期等詳細は不明である。

5号溝址

C区に位置する。南側は溝址に切られ、北側は調査区域外となる。幅1.40m前後で、検出された長さは3.0mほどである。西側は中段にテラス状の張り出し部分を有するか性格は不明である。深さは40cmほどで出土遺物はない。

遺構外出土の土器

縄文時代

本遺跡からは縄文期ととらえられる明確な遺構は検出されなかったが若干の土器片が出土している(図62)。1～9は前期間山式系の破片と考えられるもので、胎土・焼成などからすべて同一個体と考えられる。1・2は口縁破片で、口唇部は面取りされて断面方形を呈する。3～9はいずれも胴部破片で横位の羽状縄文が施文されるがループ文は認められない。内面はすべて丁寧な横ナデによって仕上げられる。胎土には砂粒と金雲母片を多量に含むが繊維はほとんど認められず、比較的固く焼き締まっている。これらはすべて7号住居内より出土したものであり、同住居内に検出されたピットのうちのいずれかがこの時期の土壌である可能性も高いが、調査にては明確に把握しえなかった。10は晩期に属する浅鉢の口縁部破片であろう。口唇部は面取りされて平坦な面を成し山形の突起状のものが認められる。外面には4本の篋指沈線が施文されるが文様構成は不明である。内面はナデ整形で仕上げられる。

弥生時代

1は条痕文系の壺形土器胴下半である。底径7.0cm・残存高13.8cmである外面の整形は貝殻条痕によるもので、胴下半は左上りの斜方向にかきあげられ胴中位以上は縦位の羽状条痕になる。内面ならびに底部はナデ整形される。器壁は全体に薄く造られており、胎土には2mm前後の石英粒を多量に含み色調は灰白色を呈する。東海地方

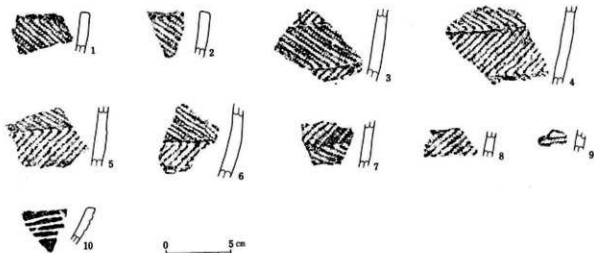


図62 遺構外出土土器①(縄文)

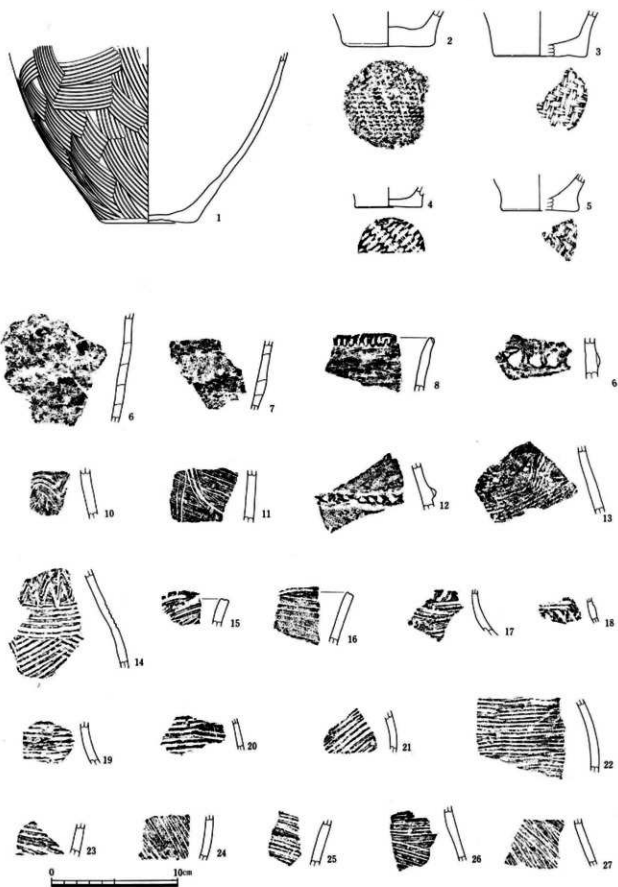


图63 遺構外出土土器②(弥生)

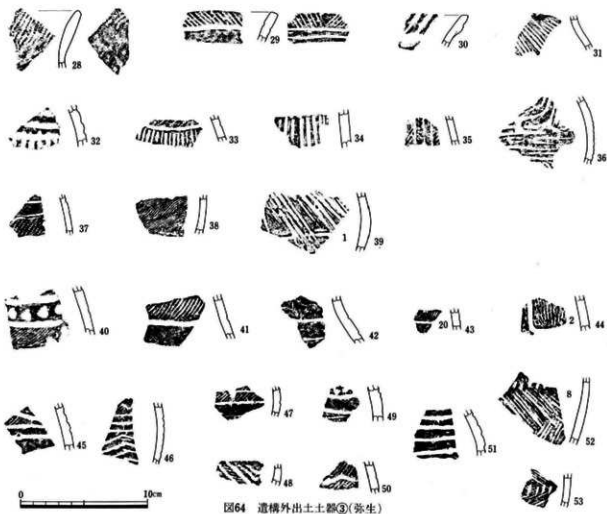


図64 遺構外出土土器③(弥生)

からの搬入品であろう。2-5は網代底を持つ底部破片である。

6-27は条痕文系等比較的古い時期に属すると思われるものである。6・7は同一個体で、外面はただナデ整形されるのみであり粘土帯接合痕を顕著にとどめる。8は直に近く立ち上がる口縁部形態を取り端面外面には篋条工具先端による刻みがなされる。内外面とも軽い横篋磨きがなされる。9は指頭による押捺が加えられたやや幅広の突帯を有する。色調は黒褐色を呈し細砂粒を多量に含む。10・11は同系統のもので10は粗い4本歯の櫛状工具によって波状文が描かれ、11は櫛条痕による調整後弧文が描かれる。12は壺中位付近であろうか。棒状工具側面による刻みを持つ突帯が付けられ、外面は篋磨きされる。遠賀川系の可能性も考えられる。

14-27は条痕文系の土器である。14は明らかに貝殻条痕によるものであり、一帯の直線文を施文した後下半には縦方向の羽状条痕を、上には波状文を2帯施文している。胎土には2mm前後の石英粒を多量に含み、色調はやや灰色がかった淡橙褐色を呈する。15・16は棒状工具による条痕を持つもので、ともに口唇部には一条の沈線が施される。17・18は頸部付近の破片でともに貝殻条痕を持ち、18には貝殻を利用したと考えられる連続刺突が認められる。19-27は棒状工具もしくは櫛状工具による条痕を持つものである。

28-39は粟林式以前のものと考えられる。28はLRの縄文を口縁部内外面に施文する。29は外面には方向を異にする斜方向の連続刻みと3本の沈線、内面には単斜方向の連続刻みと一本の沈線が施文されており、口唇部は面取りされている。30は外面にやや幅広の粘土帯が貼り付けられて斜方向の刻みが施される。口唇部は面取りされる。31には5本歯の櫛状工具による単斜方向の条痕が施文される。32-35は壺頸部から胴上半の破片であろう。

36の上半は重四角文であろうか。横方向の沈線を挟んで更にその下に重四角文が施されるようである。

40-53は栗林式土器の破片である。

奈良時代以降の土器 (表17、図65)

No	種別	器種	法量 cm			遺存度	成形・調整・施文	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵	环	13.0	5.0	3.8	2/3	ロクロナデ 底部回転糸切り	
2	"	"	12.8	6.2	3.0	1/5	ロクロナデ 底部回転糸切り	
3	"	"	12.2	7.0	3.9	1/6	ロクロナデ 底部回転糸切り	
4	"	"	13.6			1/6	ロクロナデ	
5	"	"	14.1			1/5	ロクロナデ	
6	"	"	13.2			1/5	ロクロナデ	
7	"	"	13.4			1/5	ロクロナデ	
8	"	"	12.8			1/4	ロクロナデ	
9	"	"	12.3			1/4	ロクロナデ	
10	"	"		5.3		1/2	ロクロナデ 底部回転糸切り	
11	"	"		5.5		3/4	ロクロナデ 底部回転糸切り	
12	"	"		6.0		2/3	ロクロナデ 底部回転糸切り	
13	土師	"	13.8	7.4	4.3	1/6	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き 底部回転糸切り	
14	"	椀	14.4			1/5	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き	
15	"	环		5.8		1/4	外面：ロクロナデ、下端に回転篋削り 1 内面：篋磨き→黒色処理 底部回転篋削り	
16	"	"		5.6		3/4	外面：ロクロナデ、下端に回転篋削り 1 内面：篋磨き 底部回転糸切り	
17	須恵	高台牙	14.2	9.0	3.6	1/4	ロクロナデ	
18	"	"	12.2	8.4	3.6	1/2	ロクロナデ 底部回転糸切り→回転篋削り	
19	"	"		10.0		1/2	ロクロナデ 底部回転糸切り→ナデ	
20	"	"		7.0		1/3	ロクロナデ 底部回転篋	
21	"	"		10.0		1/2	ロクロナデ 底部回転糸切り→ナデ	
22	須恵	高台牙	13.0			1/6	ロクロナデ 底部回転篋削り	
23	土師	椀	8.0			3/4	外面：ロクロナデ 内面：篋磨き→黒色処理 底部回転篋削り	「寺」刻書
24	"	"	6.8			1/2	内外黒色処理 底部回転篋削り	
25	須恵	蓋						
26	"	"						
27	"	"	15.2			1/4	ロクロナデ 天井部回転篋削り	
28	"	"	13.6			1/4	ロクロナデ	
29	"	"	17.8			1/2	ロクロナデ	
30	"	高环	15.4	9.7	7.7	1/3	ロクロナデ	
31	土師	甕	20.8			1/8	ロクロナデ	
32		内耳	22.0			1/10	ナデ	

表17 遺構外出土土器観察表

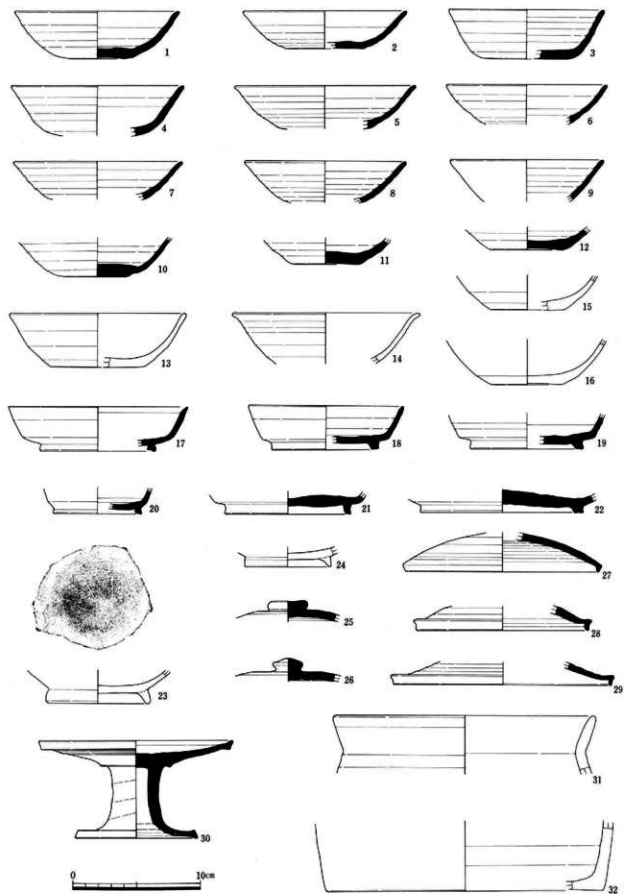


图65 遺構外出土土器④(奈良以降)

石製品、金属器 (表18、図66~68)

No.	種別	材質	出土遺構	形態・特徴等
1	円盤状石製品	砂岩	19号土壌	径25.5cm、厚さ2.4 cm。側縁はきれいに調整している
2	磨石		6号土壌	表裏面ともに磨耗
3	凹石	輝石安山岩	遺構外	
4	凹石	輝石安山岩	"	
5	石斧未製品?	結晶片岩	"	欠損部を除き全面に削痕有
6	石皿?	輝石安山岩	19号土壌	表裏面ともに磨耗
7	石皿?	輝石安山岩	19号土壌	表裏面ともに磨耗
8	凹石	輝石安山岩	3号住居址	床面出土
9	磨石?	硬質砂岩	遺構外	全面にわたって磨耗が認められる
10	打製石斧	輝石安山岩	遺構外	欠損品
11	磨製石斧	輝緑岩	15号住居址	欠損品再利用 床面出土
12	砥石	花崗質砂岩	2号住居址	全面使用
13	砥石		11号住居址	欠損品、全面使用
14	石皿?	輝石安山岩	11号住居址	
15	紡錘車	鉄	3号住上層	径4.8 cm
16	紡錘車	鉄	遺構外	径4.5 cm
17	土錘	須恵質	3号住上層	長さ7.4 cm、径3.2 cm
18	鎌?	鉄	3号住上層	
19	刀子?	鉄	遺構外	

表18 石製品、金属器観察表

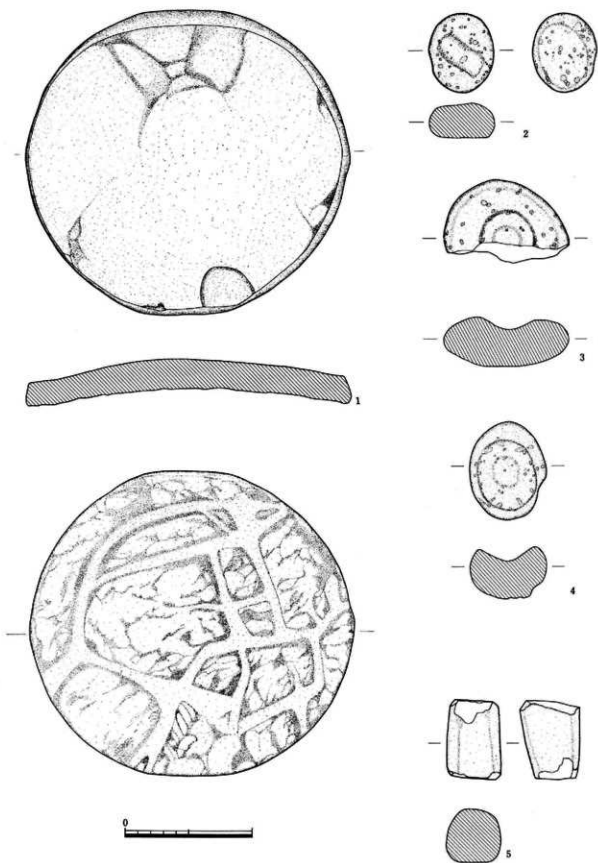


图66 石製品実測図①

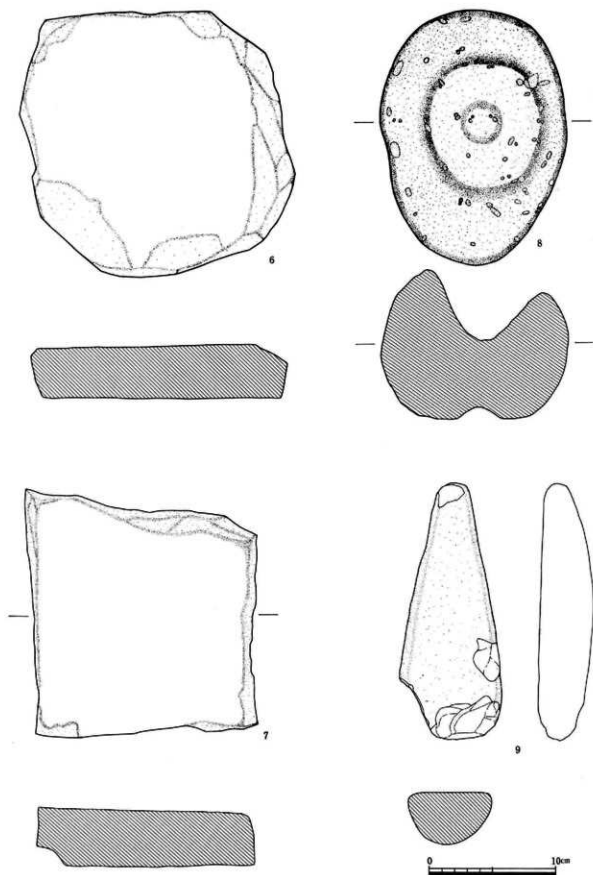


图667 石製品実測図②

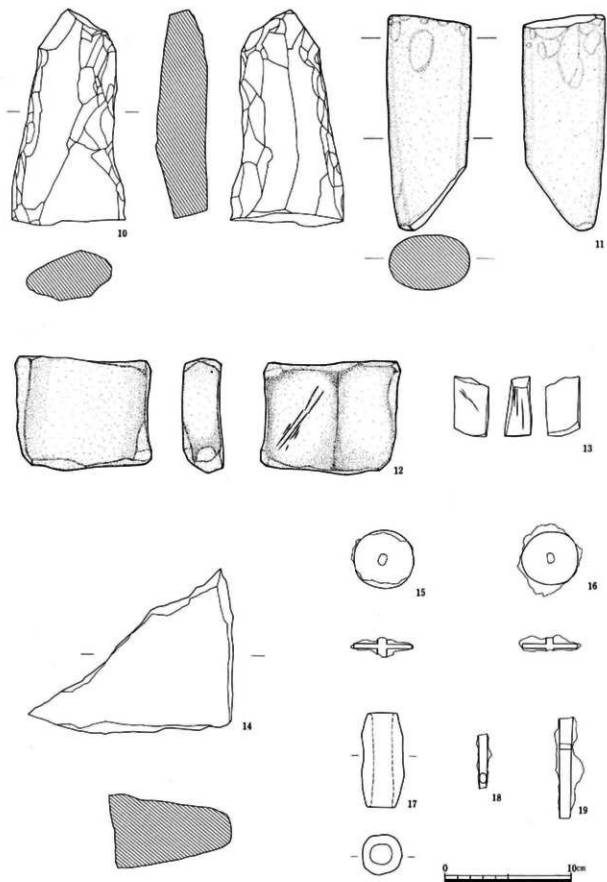


图68 石製品、金属器実測図

第4章 総括

本遺跡からは前述のごとく多数の遺構と遺物が検出された。明確なものでは住居跡17軒・土壇23基・溝址5等が確認されている。出土土器によれば本遺跡の存続期間は縄文時代前期～平安時代という極めて長期間にわたるものである。以下調査を経て気付いた2・3の点について述べ総括としたい。

縄文時代

本遺跡からは縄文期ととらえられる明確な遺構は検出されていないが、前期関山式系の土器と晩期の土器が出土している(図62)。

自然堤防上に立地する本遺跡から前期にさかのぼる資料が出土した点予想外であった。長野市内でこの時期の資料は浅川扇状地遺跡群車礼バイパスA地点3号住居址(長野市教委 1982)、浅川端遺跡18号住居址(長野市教委 1988)出土資料に次いで三例目といえる。両者ともに浅川扇状地展開面に立地する遺跡であり、本遺跡とは性格を異にする。いずれも断片的な資料で今後の資料的蓄積を期待するほかないが、当該期における遺跡立地・生産構造などを追求する上で検討すべき資料となろう。

弥生時代

弥生時代の遺構として確実なものには8号・16号住居址・14号、19号、23号土壇、6号溝址がある。A区に存在する8号住居址をのぞいて他の遺構はC区に集中するが、8号住居址と16号住居址や23号土壇出土資料の間には大きな時間差は認められず当該期の集落構造の詳細は不明である。

14号土壇は6号溝址に切られるが出土土器も条痕文系で、弥生時代ではもっとも時期のさかのぼる遺構である。本遺跡からは遺構外出土ではあるが他にかなりの条痕文系の土器が出土しており、中でも胎土などから明らかに搬入品ととらえられる資料の存在は注目される。

14号土壇以外に検出された遺構はすべて弥生時代後期・箱清水式期の所産である。19号土壇からはほぼ完形の高坏一個体と用途不明の円盤状石製品が検出されている。ともに壇底からは若干浮いており、投棄されたような状態で出土している。土壇の形状や他の出土遺物からも墓壇とは考えられず、何らかの祭祀的な色合いが強いものといえる。特に円盤状の石製品は他に類例を見ないものであり性格不明といわざるをえないが、何らかの石製模造品とも考えられる。今後の類例の増加を待ちたい。また19号土壇出土の高坏(1)の形態は青木分類のC2類(青木和明 1984)に該当するものであろう。長野市神楽橋遺跡土壇出土資料(笹沢浩 1977)と比較すると、脚端部の外反度が若干増加する点や後出的要素がうかがわれるが、ほぼ同時期の所産ととらえられよう。

6号溝址からは覆土下層より一括投棄された状態で、かなりの量の箱清水式土器が出土しているとともに、壺・甕・土付甕・高坏・鉢などこの時期の主要な構成器種が存在する。6号溝址は環濠の可能性が高く、出土資料の特徴的な点は、壺・甕ともに胴部の球形化が著しい点である。また限られた調査範囲ではあるが外来系土器は破片資料の中にも存在しない。この点よりすれば、中野市安源寺遺跡18号土壇資料(桐原健他 1967)や更地市生仁遺跡Y8号住居址出土資料(笹沢浩他 1969)とほぼ同一の時間的位置が与えられよう。8号・16号住居址・23号土壇出土資料についても同様である。

古墳時代

古墳時代の遺構として明確なものには11・12号住居址があるが、13～15号住居址も出土遺物や住居址プラン等からこの時期のものと考えられる。

すべての遺構がC区に集中しており、弥生時代後期から古墳時代にかけてはC区以西の微高地が主要な集落展開面になったことを予想される。11～15号住居址は主軸をほぼ等しくし、また11号住居址に見るように壁際に支柱をめぐらせるものが目立つ点が特徴的である。ただし出土資料はいずれも断片的なものであり詳細は不明といわざるをえない。時期的には古墳時代前期後半段階に位置するものであろう。

奈良時代以降 (3号住居址上層出土土器について)

3号住居址上層出土土器は、円面硯という特筆すべき遺物をはじめきわめて多量の土器群が一括投棄された状況で検出されたものであり、その性格とともに今後当該期の編年研究においても一つの基準資料と成り得るものと考えられる。以下出土資料について若干の基礎的検討を行い、今後の調査に備えたい。

まず出土土器群の時間的位置付けであるが、供膳具の構成は須恵器環・高台環・土器器環で、土器器環は内面黒色処理されるものが主体を占める。須恵器環の底部切り放し技法および調整手法は以下の3種類に分類できる。a. 回転系切り後外底周縁に静止篋削りを加えるもの(図 一2・3)。b. 回転系切り後外底周縁に回転篋削りを加えるもの(5・6)。c. 回転系切りのみで未調整のもの(4・7～9・19～35)。a・bのように須恵器環で回転系切り後に外底周縁に篋削り調整を加える例は長野市内では初出かと思われる。この技法は長野市内では佐久地方に類例が認められ、前田遺跡の編年(御代田町教委1987)では8世紀第3四半期以降に出現する技法のようである。次に土器器環の底部切り放し技法および調整手法を見てみると、底部全面が静止篋削りされるもの(37・41)と回転系切り後回転篋削りされるものが存在する。

現在長野市内において平安時代古相ととらえられている資料一牟礼バイパスB地点5・21・23号住居址出土資料(長野市教委 1986)との比較を試みると、須恵器環では回転篋削りが遺存する可能性を残しつつも基本的には切り放し技法は回転系切りに統一されて無調整のままであることを原則とし、土器器環は回転系切り・回転系切り後、静止削り・回転削りによる再調整がなされるものが主体を占める点指摘されている(青木和明 1987)。

この点よりすれば3号住居址上層出土資料は、前述の須恵器環で回転系切り後外底周縁に静止削りもしくは回転削りを加えるもの、ならびに土器器環で底部全面に静止削りの再調整を加えるものなどが存在することより、平安時代古相の資料群よりも先行する可能性が高いものととらえられよう。ただし善光寺平地域ではいまだ奈良時代後半段階の様相は不明瞭といわざるをえず、その年代的位置も流動的なものとならざるをえぬが、今回は一応これらの資料群を奈良時代末～平安時代初頭に位置付けておきたい。

円面硯 (図12-1)

圓脚円面硯で硯部径11.1cmである。陸部と海部との間に内境を設ける型式で、内境は外境よりもかなり高く突出する。陸部の使用による摩耗は著しく光沢を有するほどである。硯部は若干残存するにすぎないが一周に6か所長方形の透かし孔を持つものと思われ、透かし孔間には縦方向の篋掃沈線が5本施文されている。

長野市内の出土例としては泉町遺跡の踏脚硯(笹沢浩 1970)、三才田子遺跡の円面硯(米山政一 1969)に次いで3例目である。長野県内出土の円面硯のうち本例同様陸部と海部の間に内境を設ける型式のものは、管見によれば小諸市錦師屋遺跡第13号住居址(小諸市教委 1987)・御代田町前田遺跡H-20号住居址(御代田町教委 1987)・丸子町諏訪田遺跡(丸子町教委 1980)出土資料等が存在する。特に前田遺跡H-20号住居址出土資料は、内境の形態・突出度、篋掃沈線・透かし孔の数など細部にては異なるものの、本遺跡出土例ともっとも類似する資料で、出土住居址の年代も8世紀第4四半期～9世紀初頭に位置付けられている。

いずれにせよ今後の資料増加を待って再検討すべきことであるが、いずれの資料も東信地方にその分布が偏る点示唆的であり、円面硯の生産もしくは供給といった視点から今後注目すべきことであろう。

墨書土器

破片資料も含めて全部で17点出土している。本遺跡の中で墨書土器を出土している遺構は他にはない。書かれている文字はほとんどのものが「長」と考えられ、他の文字と思われるものは10・15の二点しかない。器種は須恵器環12点、内面黒色処理された土師器環4点、須恵器蓋1点である。文字が書かれている位置は環ではいずれも体部外面である。

他に朱墨の認められるものとして小破片ではあるが19が存在する。須恵器環底部破片で外面には回転系切り痕が残される。使用による磨減は認められず、転用硯として把握しうるか否かは不明である。

以上3号住居址上層出土資料について基礎的な検討を加えてきた。円面硯、「長」の字を主体とする墨書土器、さらには小片ではあるが朱墨をとどめる土器片といった遺物を含むこれらの土器群にはいったいかなる性格が与えられるのであろうか。使用痕の著しい円面硯の存在からは、そこには当然識字層の存在が想定される。さらに「朱墨は検注帳や勘農帳などの文書チェックに用いられるもの」（長野県教委 1989）との指摘によれば、そこには文書作成事務を執り行うもの、すなわち官人層の存在が導き出されてくる。余談ではあるが調査地に隣接するリング畑の所有者の話によれば、かつて転地返しを目的とした深耕の際に、3号住居址の南方付近にて礎石と考えられる大石が直線的に何点か出土したとのことである。また『塩崎村史』によれば浄光地籍からは布目瓦の出土が伝えられている。付近に役所的な権力機関、もしくは寺院址の存在した可能性はきわめて高いものと考えられる。これらの土器群の出土状況は火中に投棄されたものと考えられることは前章にて指摘しておいたが、果たして何らかの祭祀的行為の結果であるのか、あるいは単なる廃棄の結果であるのかは不明といわざるをえない。

以上簡単に、調査を通じて気付いた点に触れてきた。限られた調査範囲からは詳細不明とせざるをえない点があまりにも多いが以上をもって調査の総括としたい。

引用参考文献

- 青木和明 1984 「箱清水式土器の編年考察」『長野県考古学会誌』48
- 青木和明 1987 「IV調査のまとめ—平安時代の土器様相について—」『三輪遺跡(2) 一本郷住宅地地点』長野市教育委員会
- 桐原健 他 1967 「海戸・安源寺」長野県考古学会研究報告書2
- 五島美術館 1978 「日本の陶磁」
- 小諸市教育委員会 1988 「鋳師屋遺跡群 鋳物師屋」小諸市埋蔵文化財発掘調査報告第11集
- 笹沢 浩他 1969 「生仁」長野県考古学会研究報告7
- 笹沢 浩 1970 「長野市早町遺跡緊急発掘調査略報」『長野』30号
- 笹沢 浩 1977 「入門講座弥生土器・中部高地3」『考古学ジャーナル』No.134
- 堤 隆 1986 「野火付遺跡における平安時代の埋葬馬をめぐって」『信濃』第38巻4号
- 長野県教育委員会 1989 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡」
- 長野県考古学会 1987 「長野県考古学会誌」55・56号 —信濃における奈良時代を中心とした編年と土器様相—
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史考古資料編」全1巻(4) 遺構・遺物
- 長野市教育委員会 1982 「浅川扇状地遺跡群—半礼バイパスA・E地点遺跡—」
- 長野市教育委員会 1986 「浅川扇状地遺跡群—半礼バイパスB・C・D地点—」

- 長野市教育委員会 1988 「浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡」
- 奈良国立文化財研究所 1983 「埋蔵文化財ニュース」41 陶硯関係文献目録
- 松井 章 1987 「養老殿牧令の考古学的考察—髷れ馬牛の処理をめぐって—」『信濃』第39巻4号
- 丸子町教育委員会 1980 「三角（諏訪田遺跡・社軍神遺跡）緊急発掘調査概報」
- 御代田町教育委員会 1987 「鑄師屋遺跡群 前田遺跡」
- 米山一政 1969 「長野市三才田子遺跡」『信濃考古』No28

第5章 篠ノ井遺跡群 —市道山崎唐猫線地点— における地質

1 はじめに

篠ノ井遺跡群は千曲右岸の自然堤防を構成する自然堤防堆積物（加藤・赤羽、1986）のうえに立地し、褐色低地土（梅村、1985）の分布域に属す。

発掘調査に際してCおよびD地点の地質層序の記載を行なう機会を得たので、その結果をここに報告する。

2 地質記載

C地点とD地点の地質層序は下位より、次のとおりである。地質の色調については、標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局監修、1967）、にしたがった。

IV層 黒褐色シルト層ないしにふい黄褐色砂質シルト層・斑鉄がまだらじょうに認められる。III層の埋没B層と思われる。

III層 黒褐色シルト層を主体とする埋没土壌。C地点に典型的に見られ、上位の塊状でより黒色の強い部分とその下のクラックの発達するやや明るい部分のセットが2サイクル認められる。本層は2層の黒色土壌が重なって出来た埋没古土壌であり、この地点では最も発達した古土壌である。本層中には縄文時代から平安時代の文化層が含まれるという。

II層 黒褐色シルト層・C地点では下半部に高師小僧が多く認められる。

暗褐色細粒砂層・塊状で色調はやや明るい。II層はI層の埋没B層と見られる。無遺物層である。

I層 下半部は黒褐色の砂質シルト層ないしシルト質細粒砂層で、埋没古土壌である。やや空けきみとめられる。上半部は暗褐色細粒砂層で、塊状で色調はやや明るい。

最上部の耕土は、黒褐色砂質シルト層ないしシルト質砂層であり、黒色土壌となっている。

3 考察 —埋没土壌と文化層—

本遺跡に見られる一連の地層は、自然堤防を構成する沖積層に属す。このなかに2層にわたって埋没土壌が見られることは注目される。堆積速度のおそい多くの地域では、黒色土壌のなかに間層が堆積して埋没土壌となっている例は見られず、たいてい一連の黒色土壌となっている。

したがって本遺跡の地質は、土壌形成作用よりも堆積作用が速く、また堆積環境が何度か変化したことが推定される。一連の変化の主要な要因は、II層とI層に見られる細粒砂層の堆積であり、千曲川の氾濫等によるものである。

このような間層となる砂層は、長野盆地内である程度のひろがりをもつことが予想されるので、盆地内における遺跡層位の対比を行なう上では重要なものである。また短時間で形成された堆積物であるので、多くは無遺物層となり、文化層はその直下に覆われる埋没土壌中に存在するものと予測される。

（中村由克）

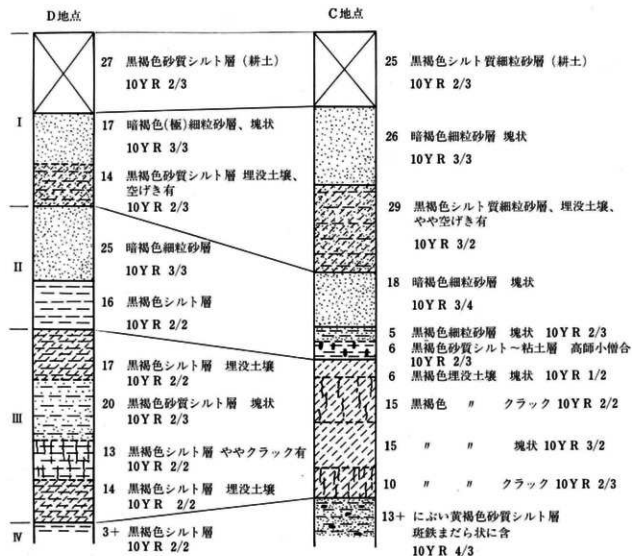
【謝辞】 今回の報告にあたっては長野市埋蔵文化財センターに調査の機会を与えていただいた。記して感謝する次第である。

文 献

加藤碩一・赤羽貞幸 (1986) 長野地域の地質・地域地質研究報告 (5万分の1地質図幅)、地質調査所

梅村 弘 (1985) 善光寺平の灰色低地土壌、第32回ペドロジスト野外見学会資料、ペドロジスト懇談会編、70-76P

農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖、富士平工業株式会社



1 図 地質柱状図

調査地近景



1号住居址



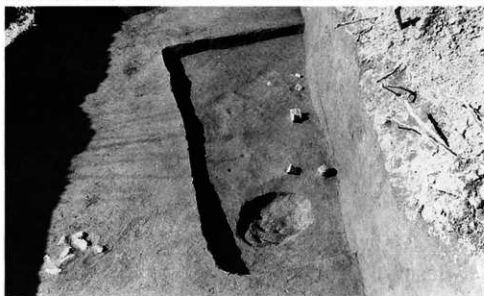
2号・3号住居址



4号住居址



5号住居址



6号住居址



8号住居址



9号住居址



10号住居址





左：11号住居址
右：12号住居址



左：13号住居址
右：15号住居址

16号·17号住居址



16号住居址



17号住居址



1号沟址



2号沟址



4号、5号沟址



6号溝址



同遺物出土状況



同南壁セクション



1号土墩



2号土墩



6号土墩

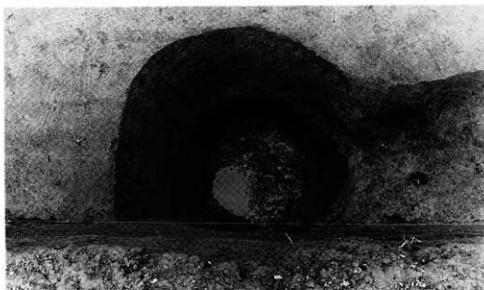




12号土壤



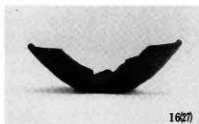
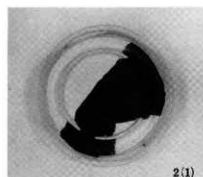
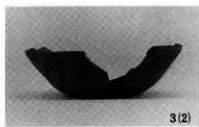
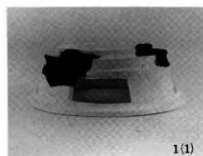
19号土壤



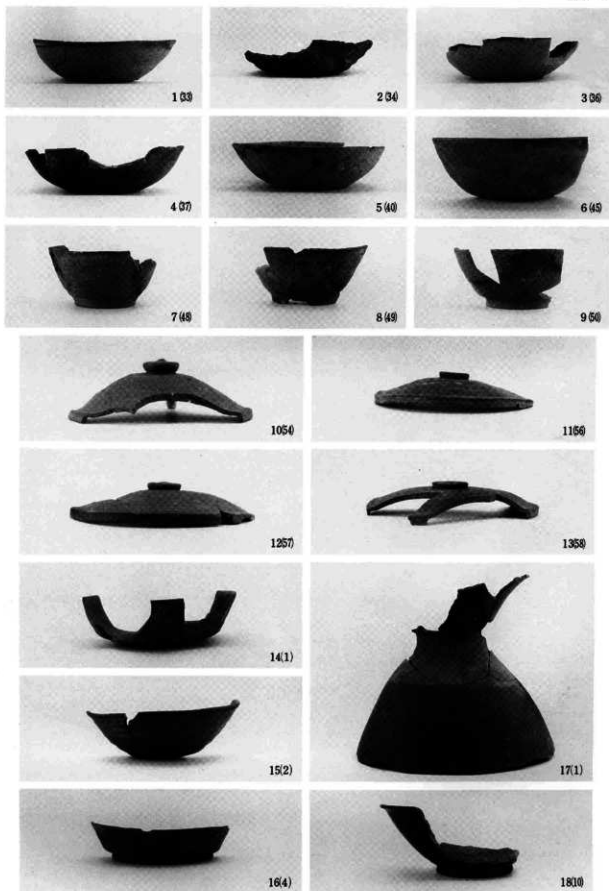
19号土壤
遺物出土狀況



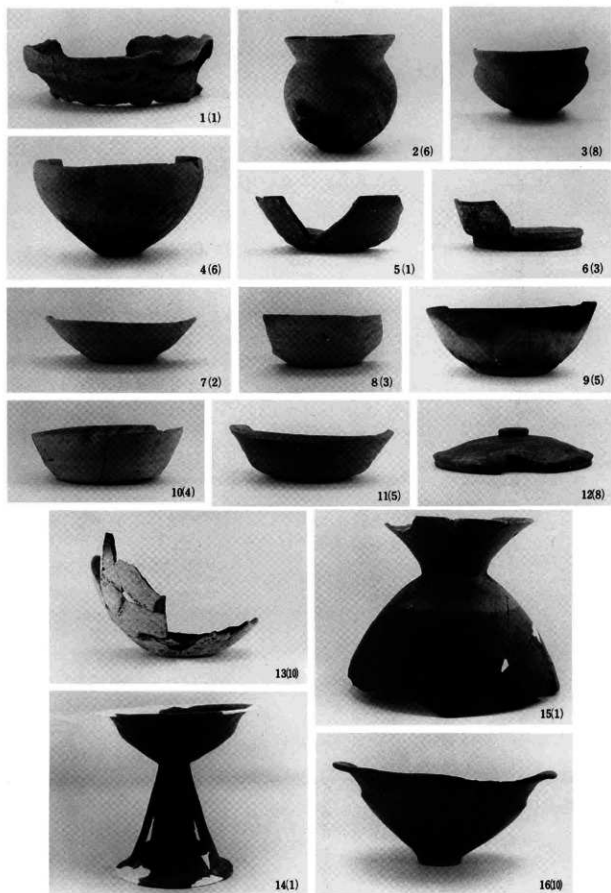




第3号住居址上層出土土器 ()内番号は、実測図番号を示す



3号住居址上層 (1~13) 6号住居址 (14~16) 8号住居址(17) 10号住居址(18) 出土土器



11号住居址(1~3)、12号住居址(4)、5号土壤(5,6)、13号土壤(7~9)、(7-9)⇩4号沟址(15、16)出土土器